

### (3) キャリブレーション

旧印西市域での既往解析条件における再現計算結果と比較し、概ね同程度であることを確認する。

- ◆対象降雨：2003年8月5日（気象庁我孫子観測所）（10分間最大降雨量19.5mm）
- ◆管渠の条件、下端水位は、平成19年度内水氾濫解析報告書の解析条件をそのまま使用。  
\*ただし、前回手賀川、将監川沿川において適用されていた計画高水位（手賀川 Y.P.3.75m、将監川 Y.P.2.05m）を、他の河川や管渠の地盤高で使用されている T.P.に変換して使用(T.P. = Y.P. - 0.84m)。
- ◆氾濫原の平均地盤高は、レーザープロファイラで取得した地盤高より、50m メッシュ平均地盤高を算出して使用。

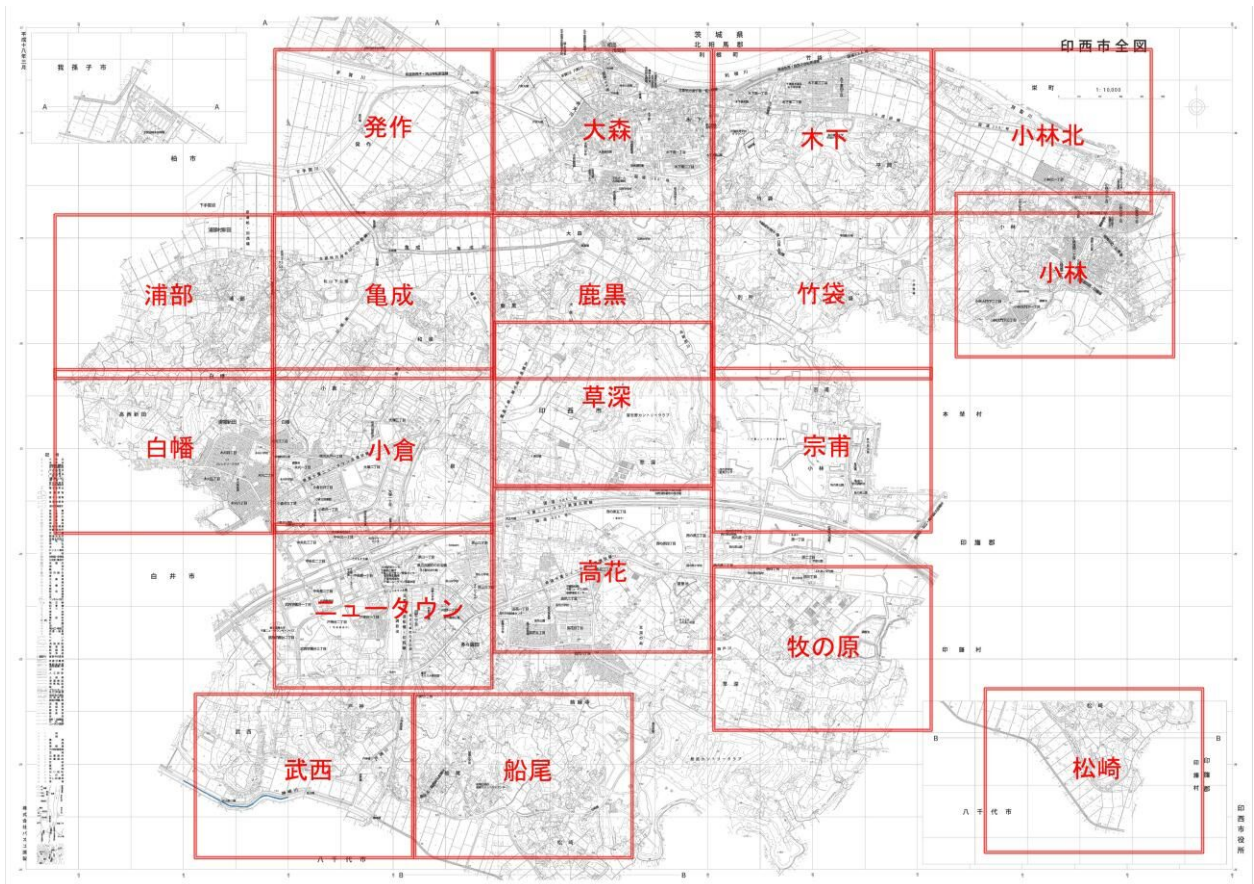


図- 5. 1.15 地区界図

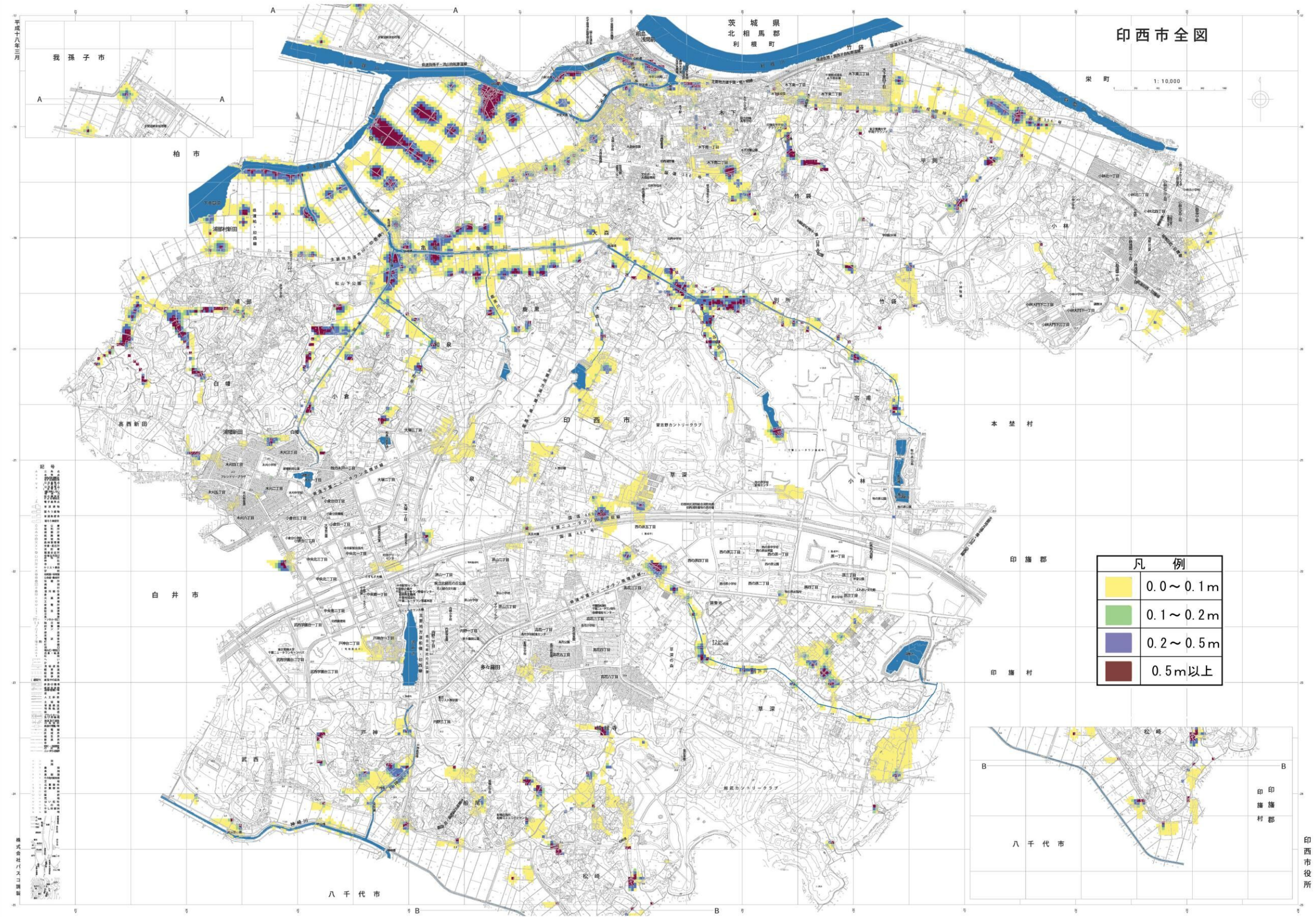


図- 5.1.16 解析結果図（既往報告書）

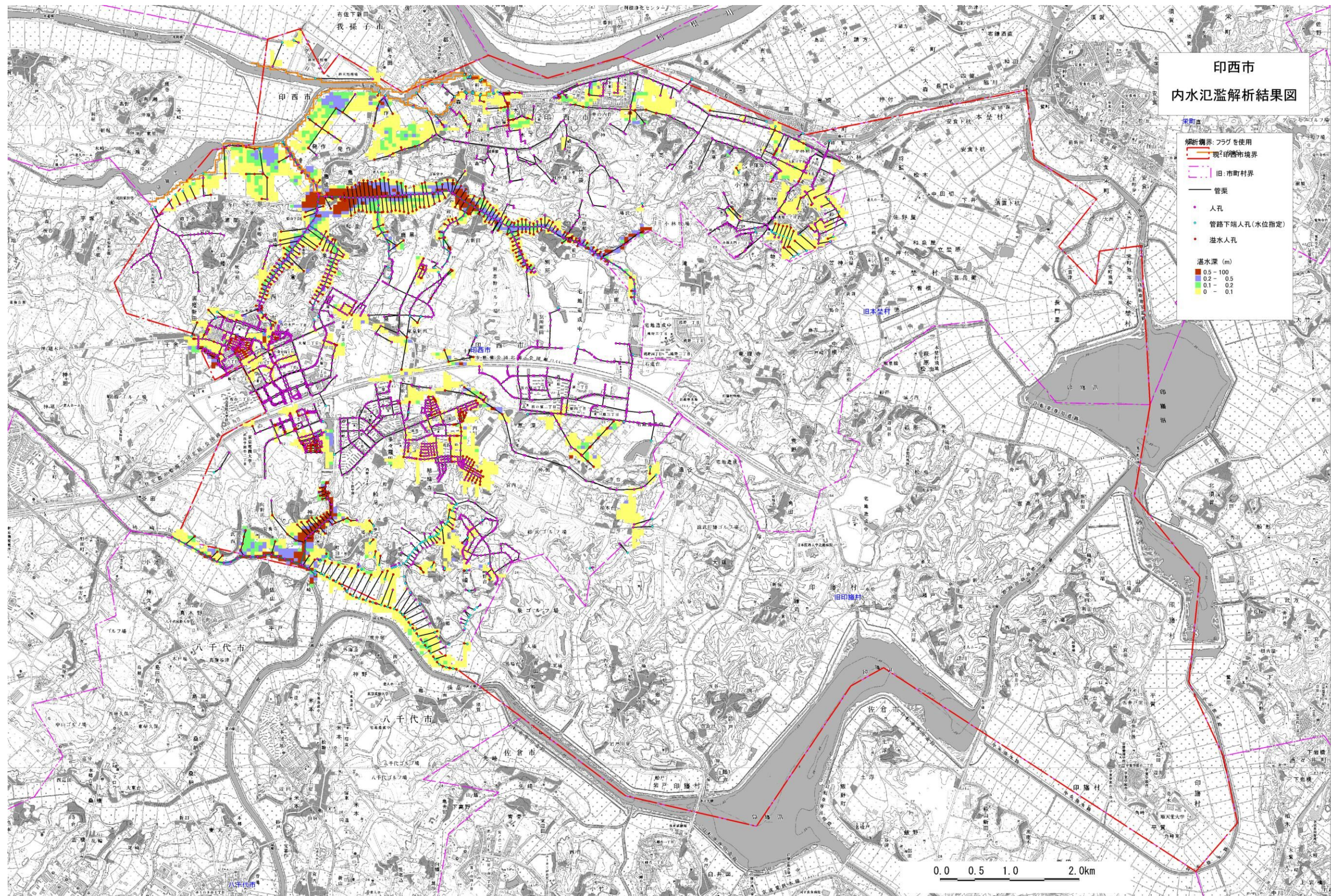


図- 5.1.17 解析結果図 (再現計算)

## 1. 発作地区

### ■ 今回の解析結果

発作地区における浸水発生状況を図- 5. 1.18に示す。

これに示されるとおり、手賀川沿川の水田地帯の広範囲において大規模な浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約0.6mであった。

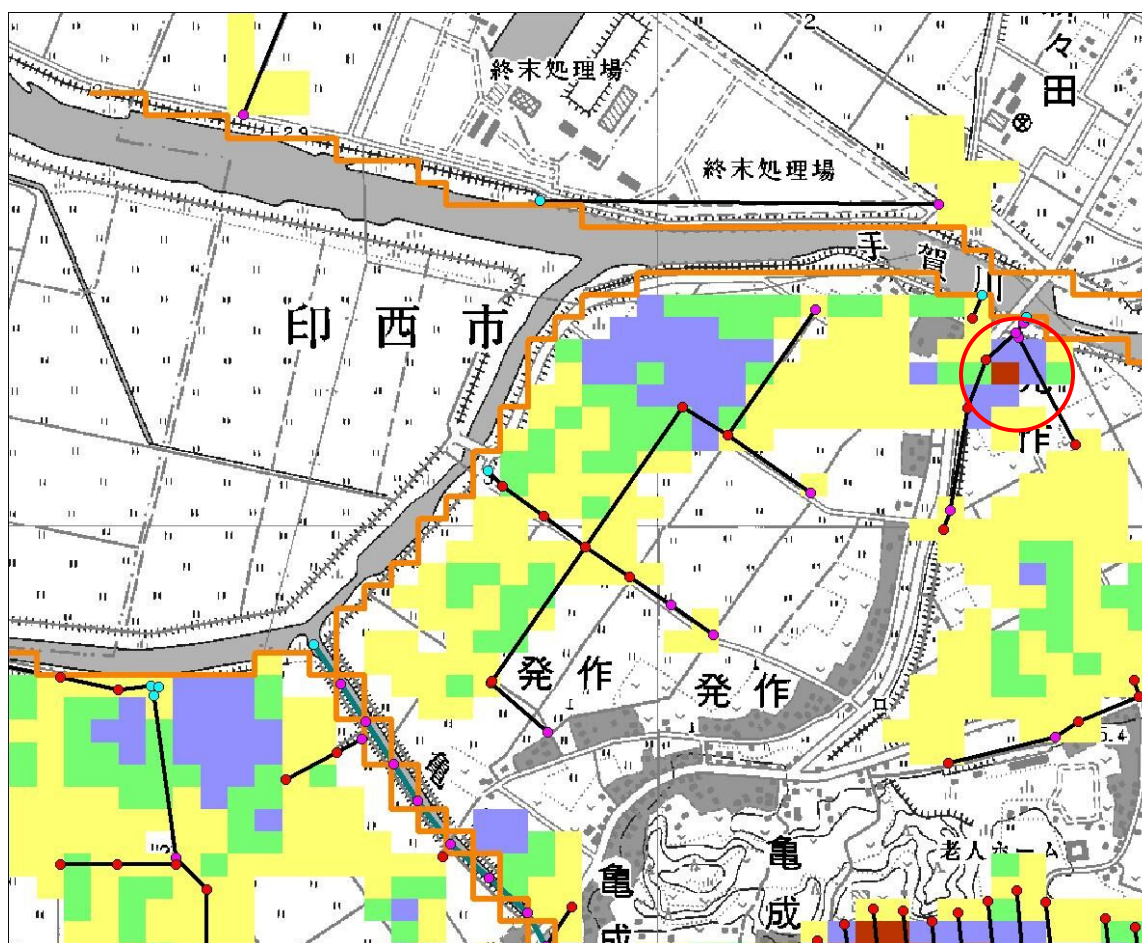


図- 5. 1.18 発作地区における浸水発生区域

## ■平成 19 年度報告書抜粋

発作地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.19に示す。

これに示されるとおり、手賀川沿川の水田地帯の広範囲において大規模な浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 2.2m であった。

当地区における浸水発生の原因としては、放流先である下手賀川における計画高水位 (3.75m) が、周辺の地盤高より高いことによる排水不良が挙げられる。

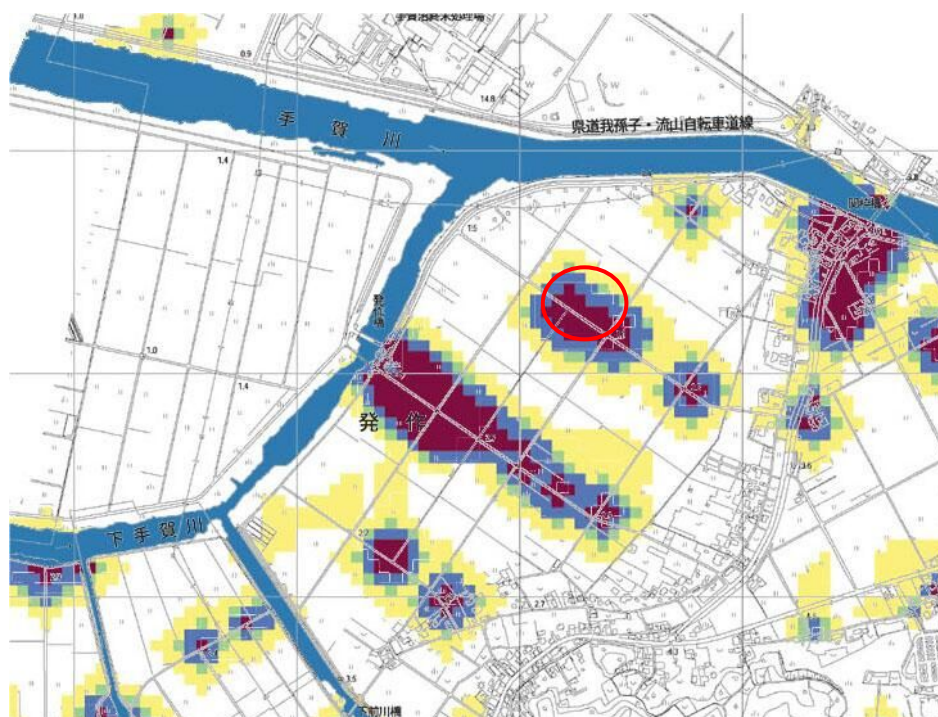


図- 5. 1.19 発作地区における浸水発生区域 (前回)

## 2. 大森地区

### ■今回の解析結果

大森地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.20に示す。

これに示されるとおり、手賀川および弁天川沿川の水田地帯ならびに、亀成川および大森川沿川の地域において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 1mであった。

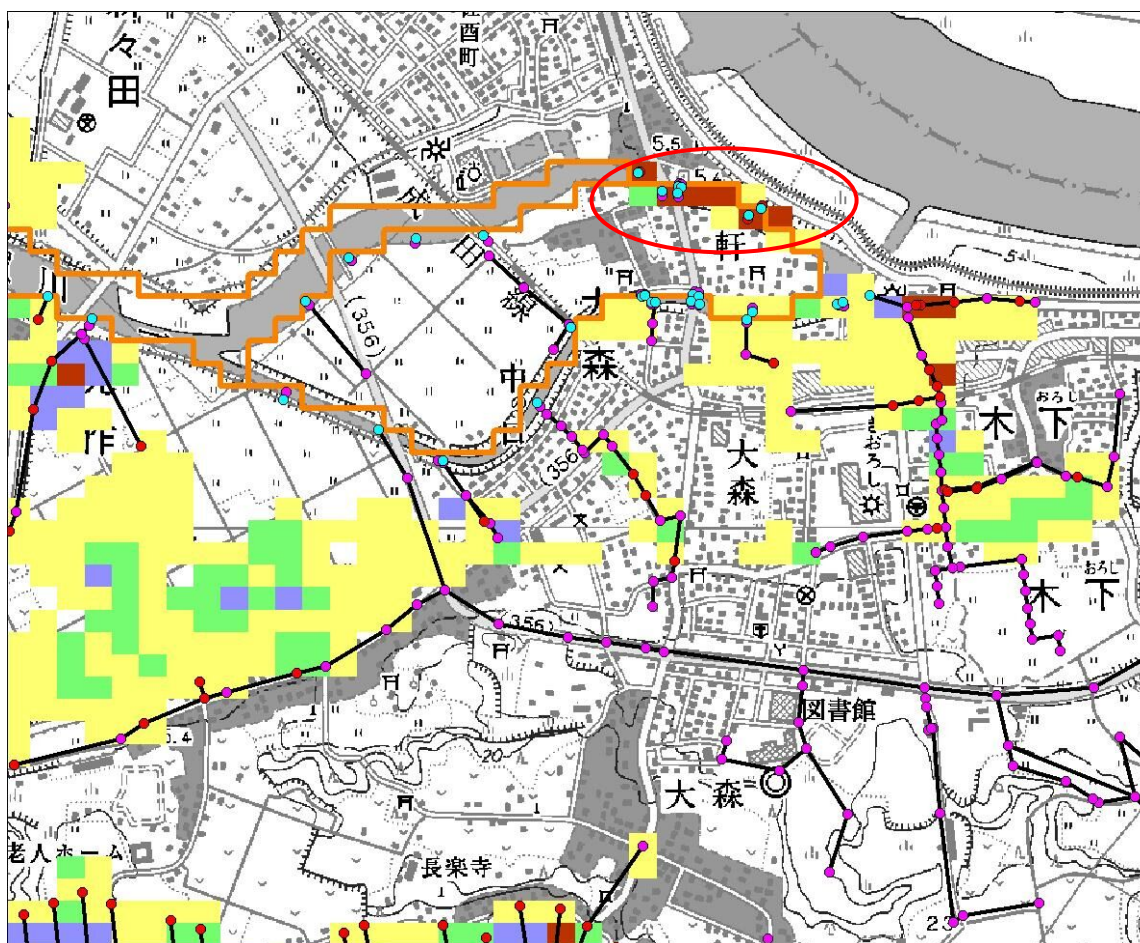


図- 5. 1.20 大森地区における浸水発生区域

## ■平成 19 年度報告書抜粋

大森地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.21に示す。

これに示されるとおり、手賀川および弁天川沿川の水田地帯ならびに、亀成川および大森川沿川の地域において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 2.8m であった。

この浸水被害の発生要因としては、弁天川ならびに亀成川の水位上昇に伴う排水不良が挙げられるが、亀成川水系では、亀成川改修工事全体計画により河道の拡幅が計画・着工されていることから、改修工事の進展に伴いこの地域における浸水被害は解消・減少することが見込まれる。

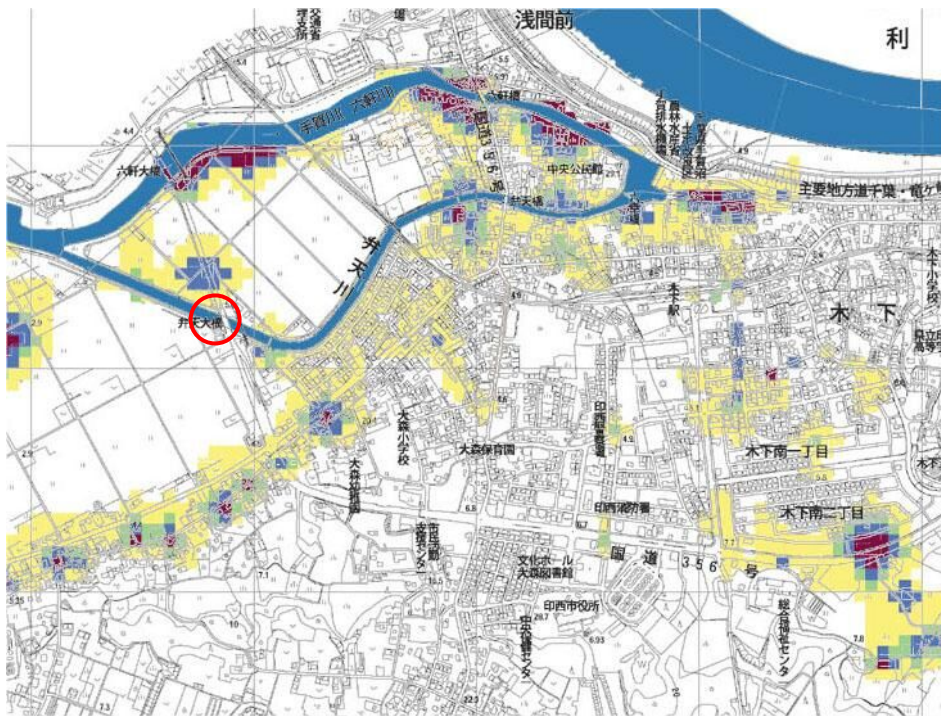


図- 5. 1.21 大森地区における浸水発生区域 (前回)

### 3. 木下地区

#### ■今回の解析結果

木下地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.22に示す。

これに示されるとおり、木下東一丁目から東側の水田地帯にかけての広い範囲、ならびにJR成田線沿線において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約0.7mであった。

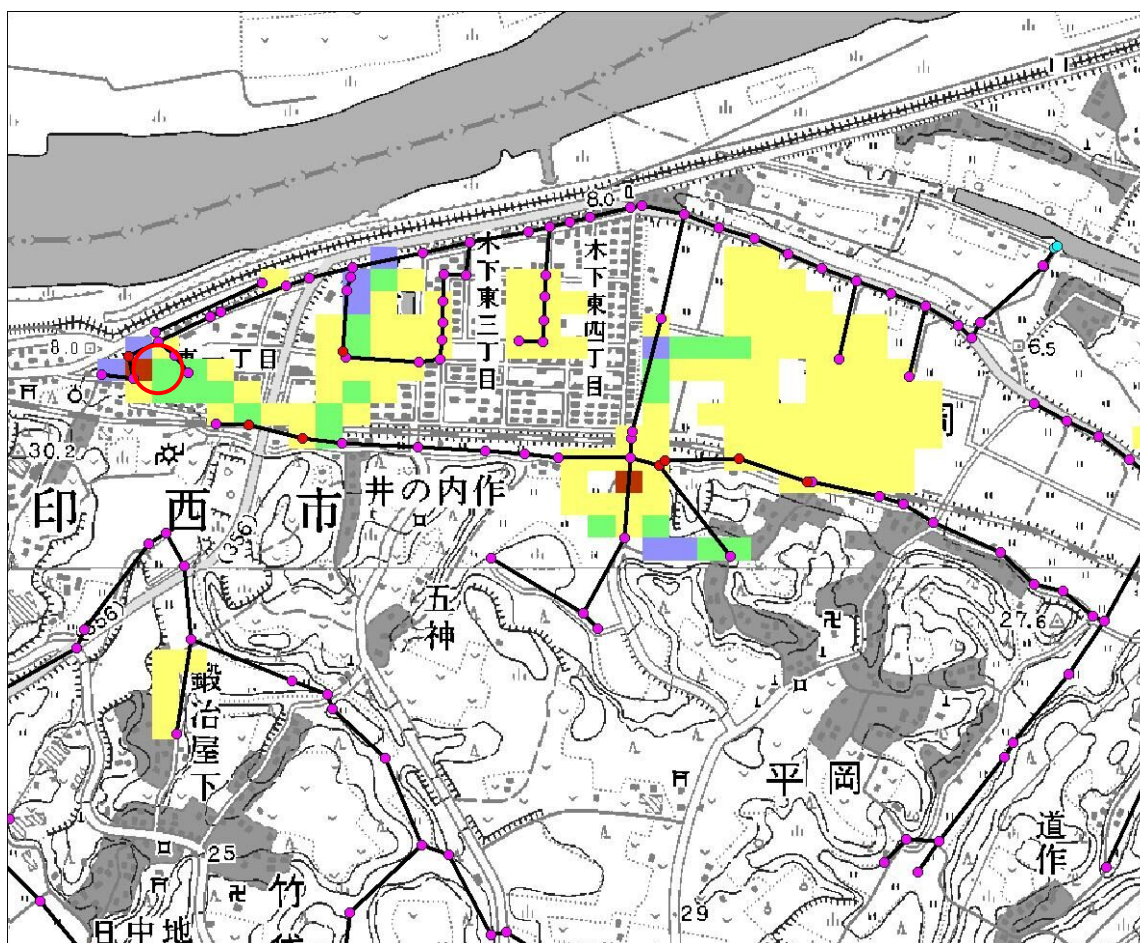


図- 5. 1.22 木下地区における浸水発生区域



## ■平成 19 年度報告書抜粋

木下地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.23に示す。

これに示されるとおり、旧印旛高等学校北側の丘陵地以外の広い範囲ならびに JR 成田線沿線において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 2.4m であった。

これらの区域における浸水被害の発生要因としては、当該地域の地盤が周辺に比して低いことや、解析対象降雨に対して既設雨水管渠の流下能力が不足していることが考えられる。

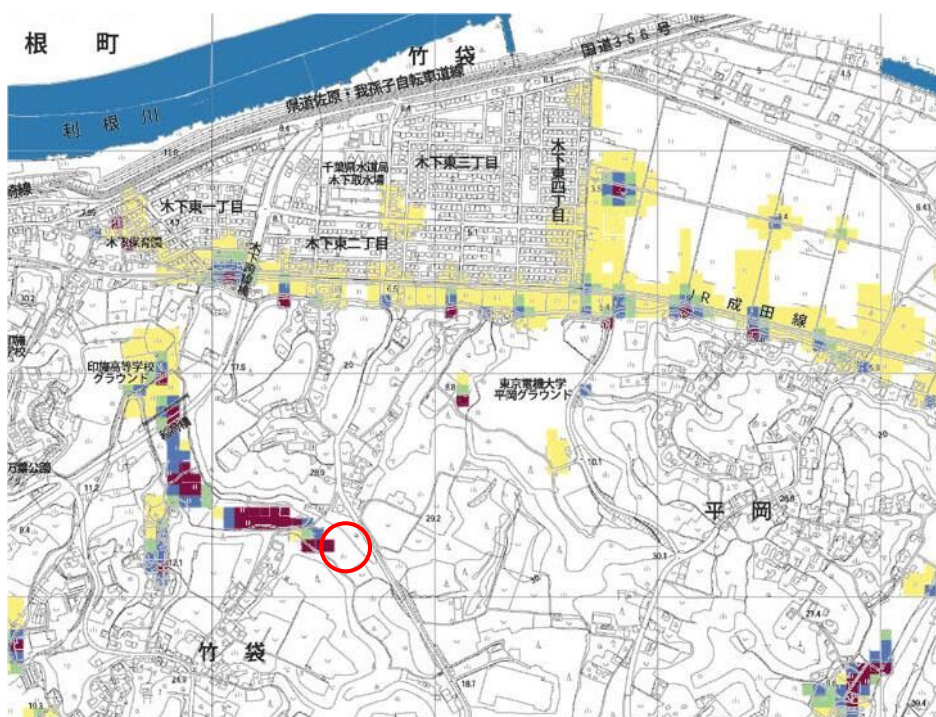


図- 5. 1.23 木下地区における浸水発生区域 (前回)

#### 4. 小林北地区

##### ■ 今回の解析結果

小林北地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.24に示す。

これに示されるとおり、将監川沿川の水田地帯、小林北一丁目から五丁目の住宅地およびJR成田線沿線において浸水被害の発生が予測された。国道 356 号線沿線は地盤高が高く、大規模な浸水被害の発生は予測されなかった。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 0.48m であった。

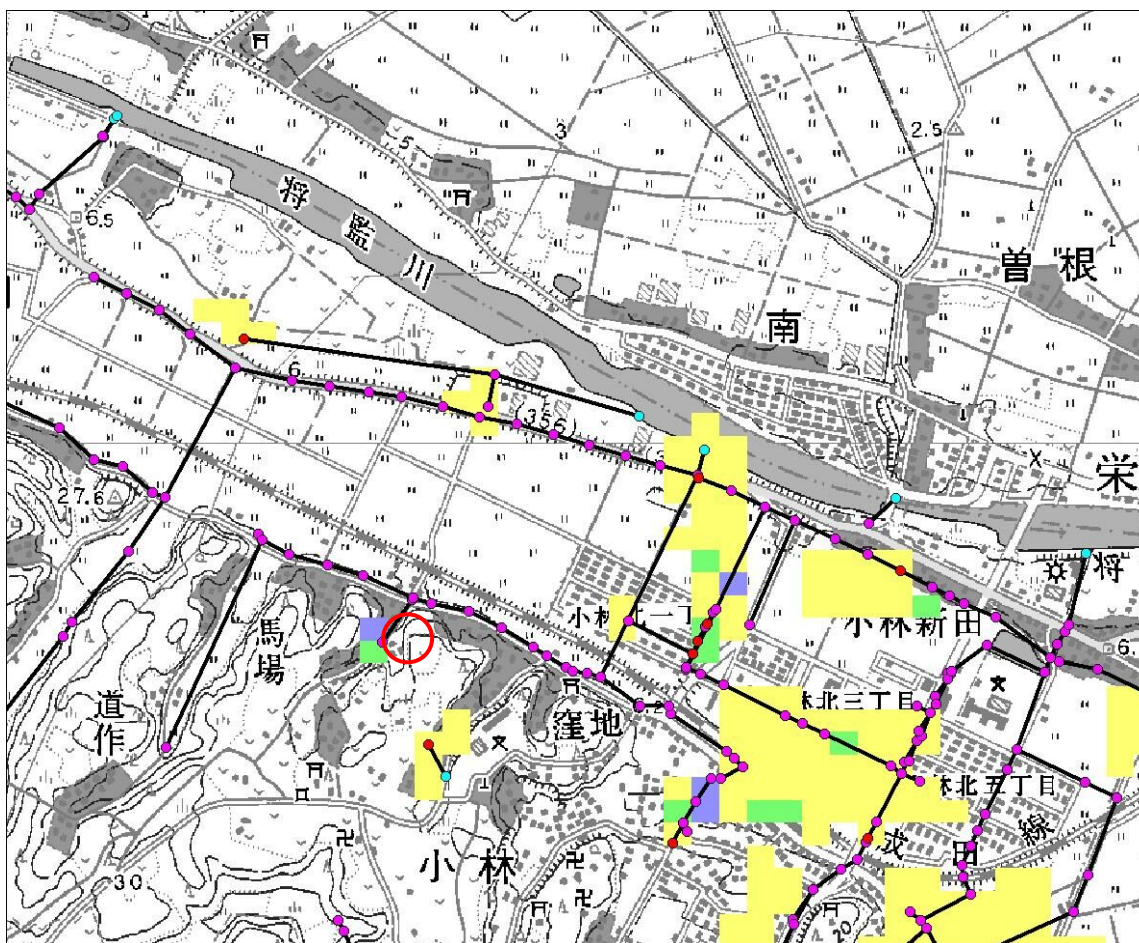


図- 5. 1.24 小林北地区における浸水発生区域

## ■平成 19 年度報告書抜粋

小林北地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.25に示す。

これに示されるとおり、国道 356 号線沿線において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 1.2m であった。

この浸水被害の発生要因としては、解析対象降雨に対し既設雨水管渠の流下能力が不足していることが挙げられる。

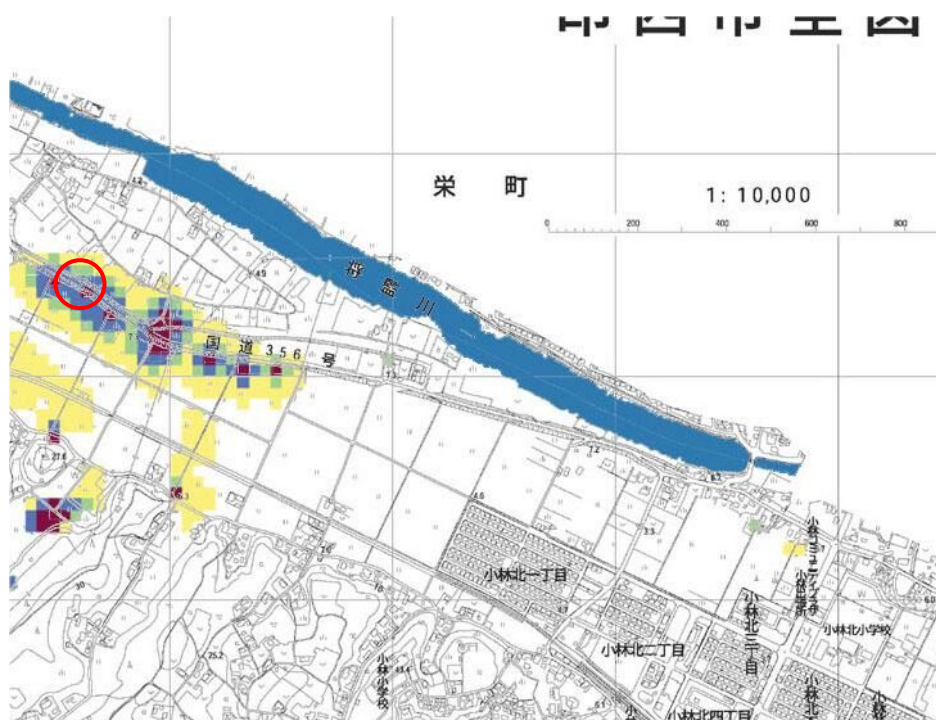


図- 5. 1.25 小林北地区における浸水発生区域 (前回)

## 5. 浦部地区

### ■ 今回の解析結果

浦部地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.26に示す。

これに示されるとおり、手賀沼沿いの水田を中心とした低地部において浸水被害の発生が予測された。内陸部の谷間の水田および管渠においては浸水がみられなかった。当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 0.19m であった。

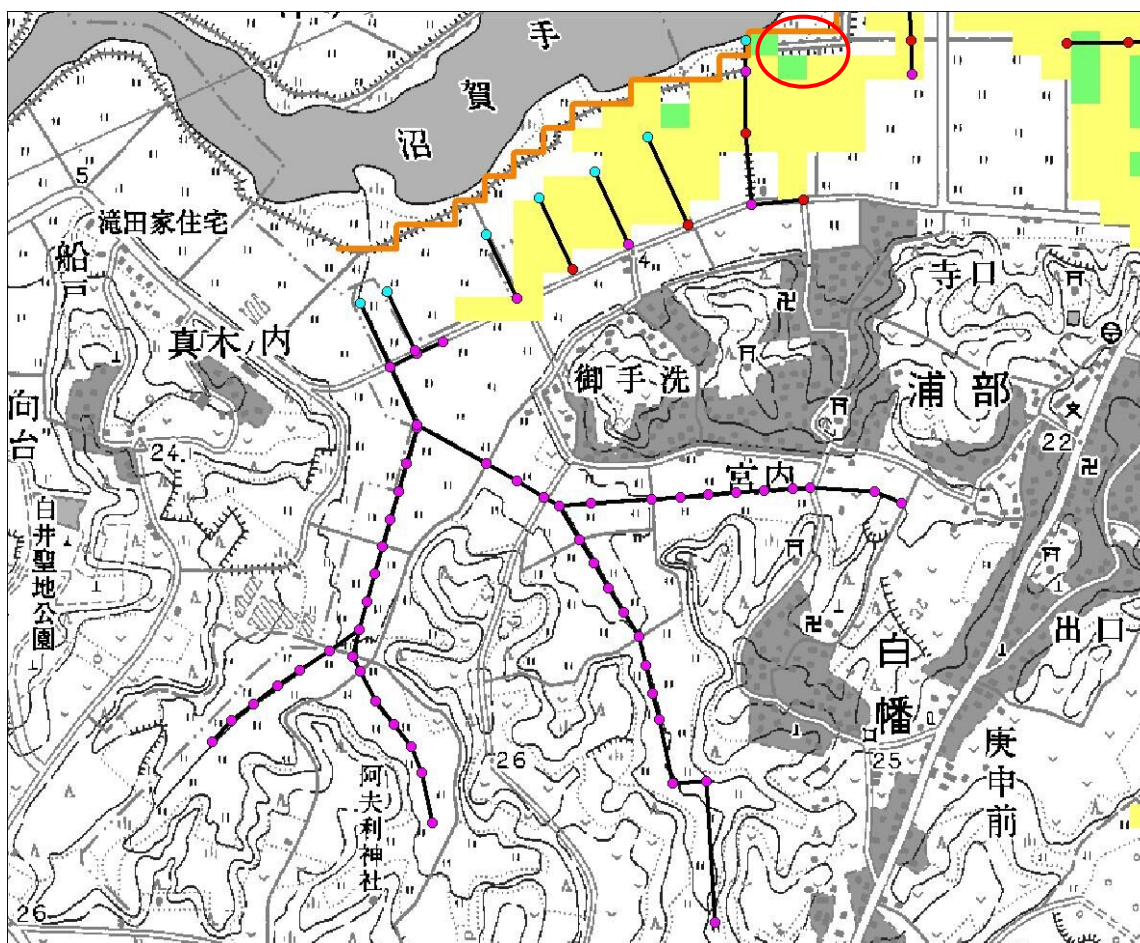


図- 5. 1.26 浦部地区における浸水発生区域

## ■平成 19 年度報告書抜粋

浦部地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.27に示す。

これに示されるとおり、水田を中心とした低地部において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 2.0mであった。

これらの区域における浸水被害の発生要因としては、放流先である手賀川水位の上昇に伴う排水不良が挙げられる。



図- 5. 1.27 浦部地区における浸水発生区域 (前回)

## 6. 亀成地区

### ■ 今回の解析結果

亀成地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.28に示す。

これに示されるとおり、亀成川沿川の広範囲において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 1.5m であった。浸水深が深い領域は相対的に地盤高が低くなっており、管渠からの溢水が溜まりやすいと考えられる。

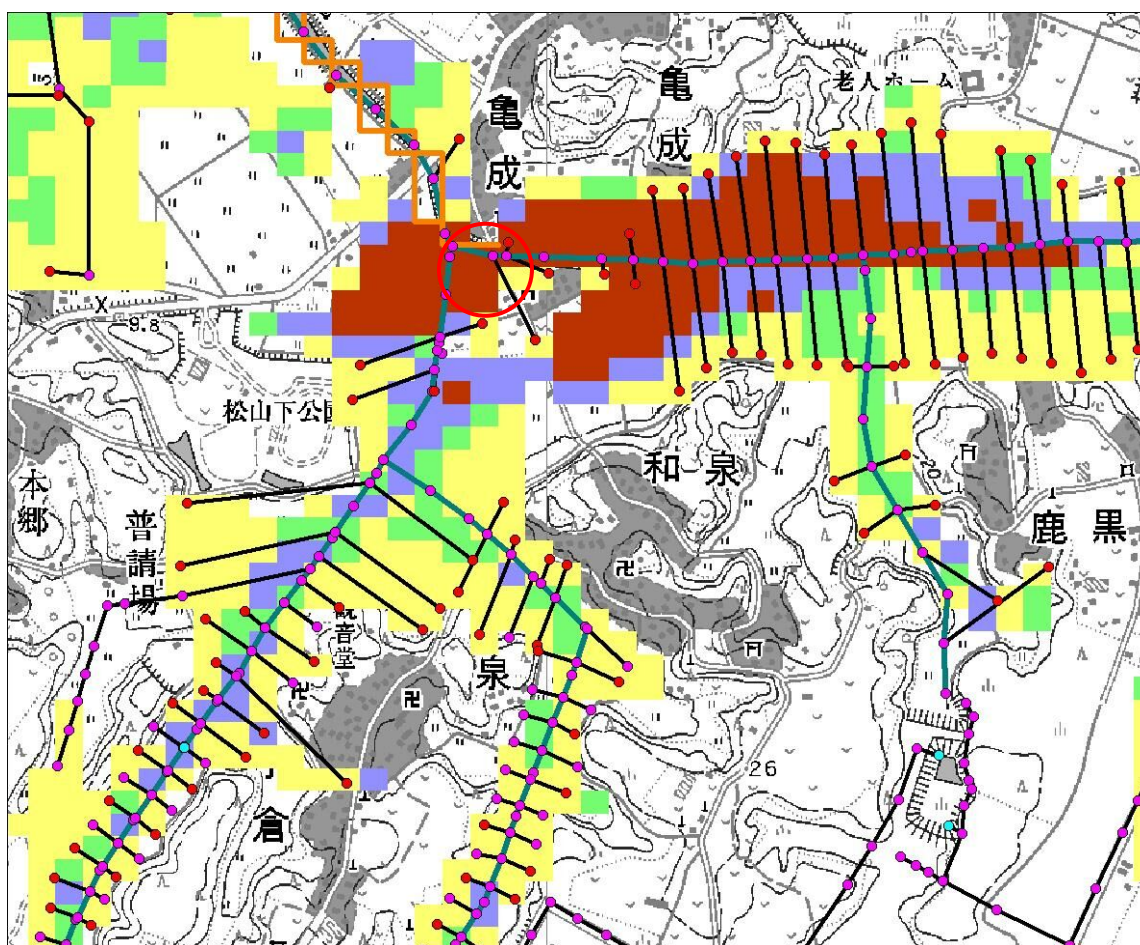


図- 5. 1.28 亀成地区における浸水発生区域

## ■平成 19 年度報告書抜粋

亀成地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.29に示す。

これに示されるとおり、亀成川沿川の広範囲において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 2.3m であった。

これらの区域の浸水被害の発生要因としては、亀成川の水位上昇による既設水路の排水不良ならびに、解析対象降雨に対する既設水路の流下能力不足が挙げられる。

このため、亀成川の改修工事の進展により、亀成川の水位上昇が軽減されることにより、浸水被害の発生も解消ないしは軽減されることが見込まれる。



図- 5. 1.29 亀成地区における浸水発生区域 (前回)

## 7. 鹿黒地区

### ■ 今回の解析結果

鹿黒地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.30に示す。

これに示されるとおり、鹿黒川沿川、大森川沿川ならびに、亀成川左岸地域において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 1.8m であった浸水深が深い領域は相対的に地盤高が低くなっており、管渠からの溢水が溜まりやすいと考えられる。

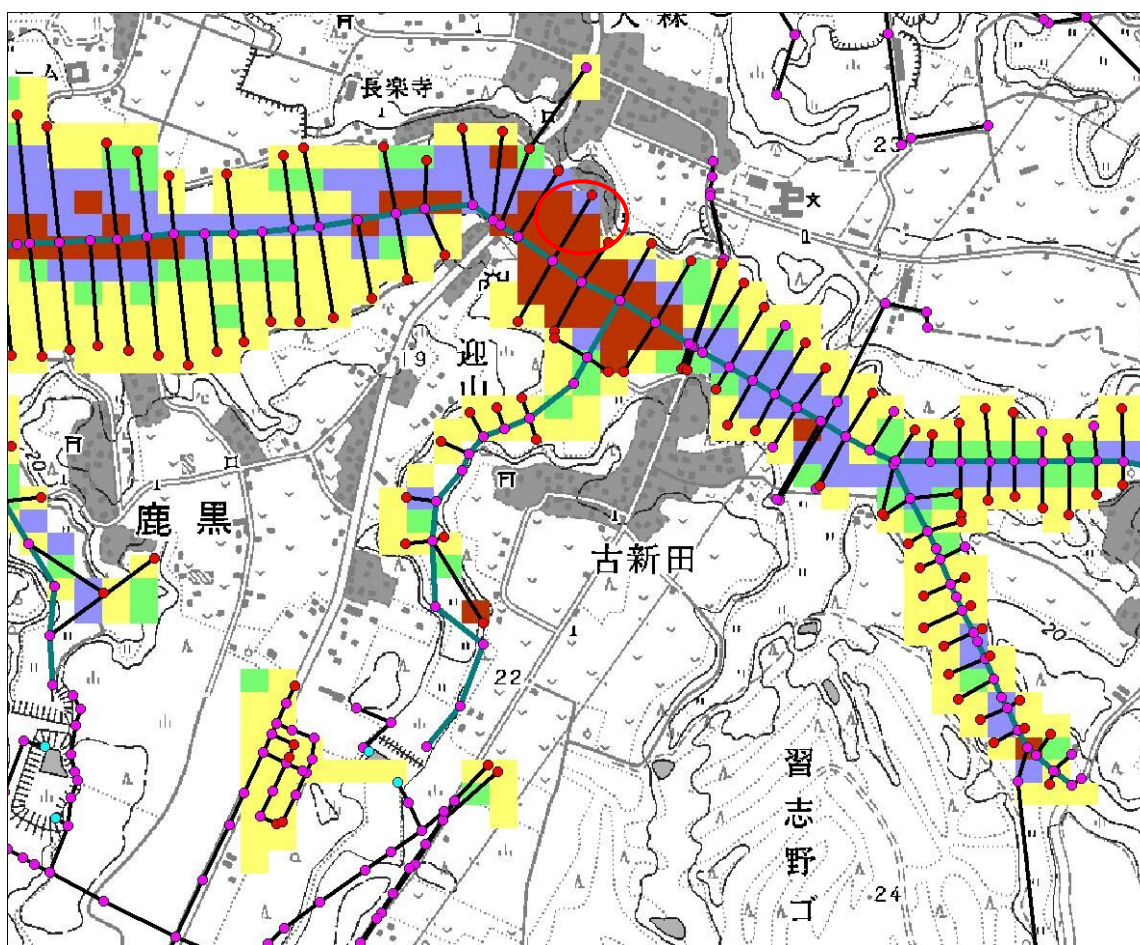


図- 5. 1.30 鹿黒地区における浸水発生区域



## ■平成 19 年度報告書抜粋

鹿黒地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.31に示す。

これに示されるとおり、鹿黒川沿川ならびに、亀成川左岸地域において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 1.8m であった。

この浸水被害の発生要因としては、亀成川の水位上昇に伴う排水不良が挙げられるが、亀成川水系では、亀成川改修工事全体計画により河道の拡幅が計画・着工されていることから、改修工事の進展に伴いこの地域における浸水被害は解消ないしは減少することが見込まれる。

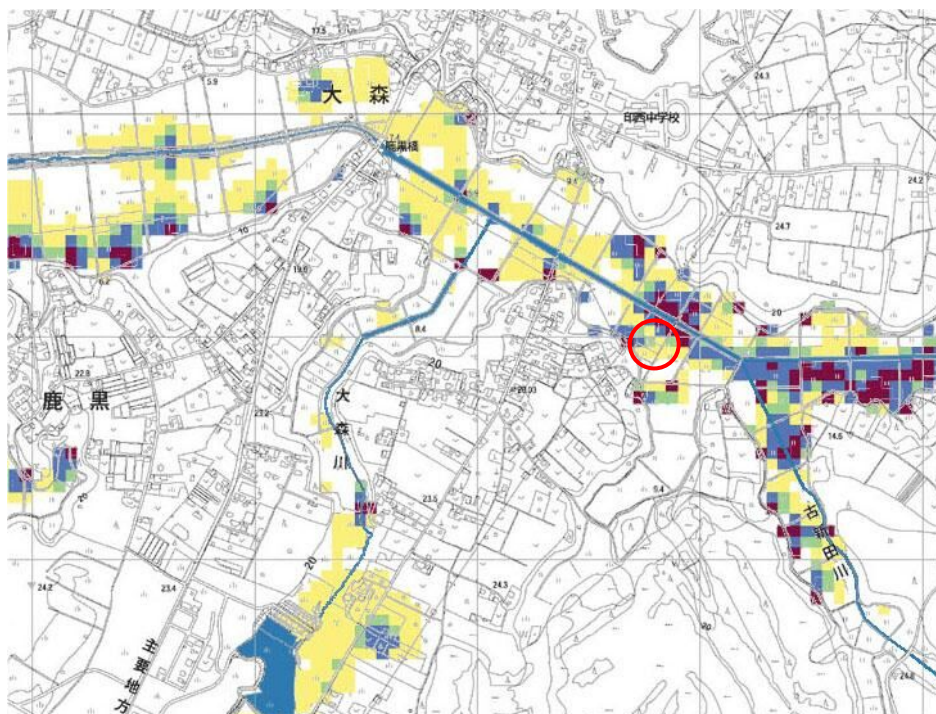


図- 5. 1.31 鹿黒地区における浸水発生区域 (前回)

## 8. 竹袋地区

### ■ 今回の解析結果

竹袋地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.32に示す。

これに示されるとおり、小林牧場から亀成川に向かって南西に伸びる水路、および亀成川沿川において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 2.6m であった。当該箇所は谷間の地盤高の低い地域であり、かつ集水面積が 49.8ha と大きい。

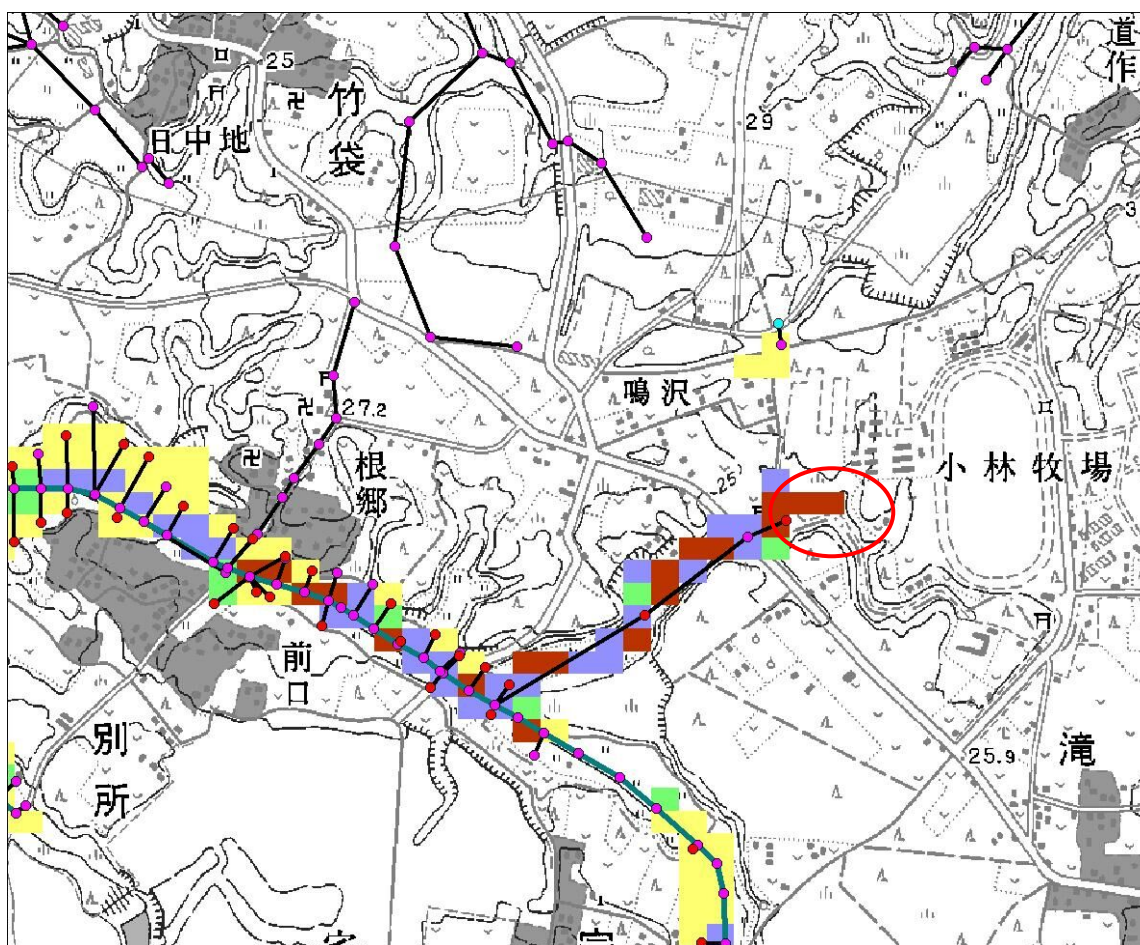


図- 5. 1.32 竹袋地区における浸水発生区域

## ■平成 19 年度報告書抜粋

竹袋地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.33に示す。

これに示されるとおり、総合福祉センター近傍の地盤高の低い区域において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 1.5m であった。

この区域における浸水被害の発生要因としては、解析対象降雨に対する既存水路の流下能力不足が挙げられる。

本地域は、下水道計画区域ではないため、公共下水道事業による雨水管渠の整備は見込めないが、道路側溝等の整備を進めることにより、この浸水被害の減少または解消が見込まれる。

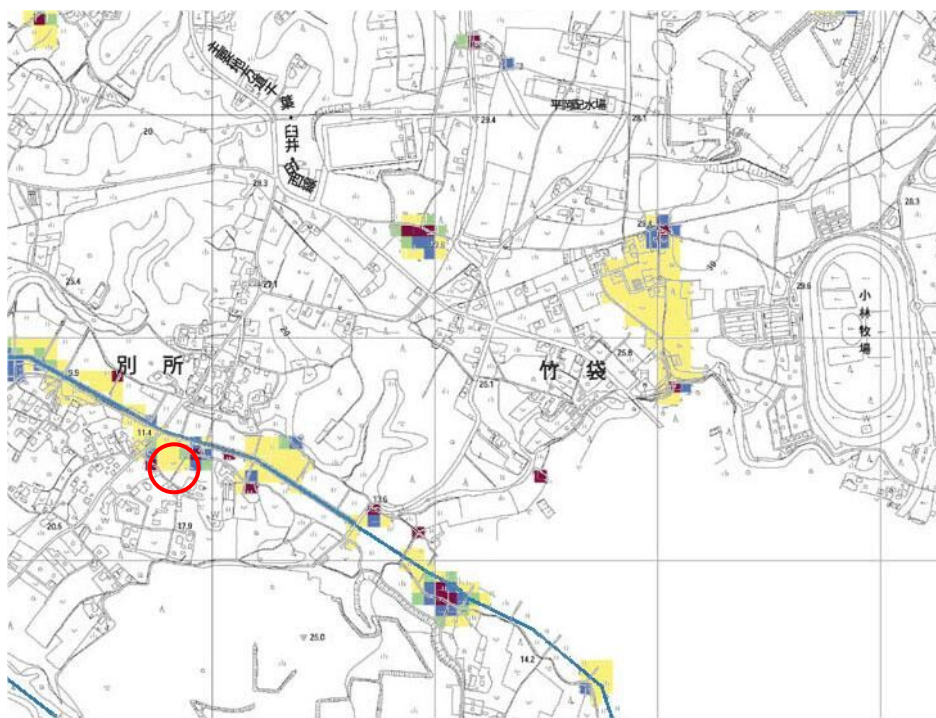


図- 5. 1.33 竹袋地区における浸水発生区域 (前回)

## 9. 小林地区

### ■ 今回の解析結果

小林地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.34に示す。

これに示されるとおり、低地部の水田、住宅地の広範囲にわたって浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約0.48mであった。

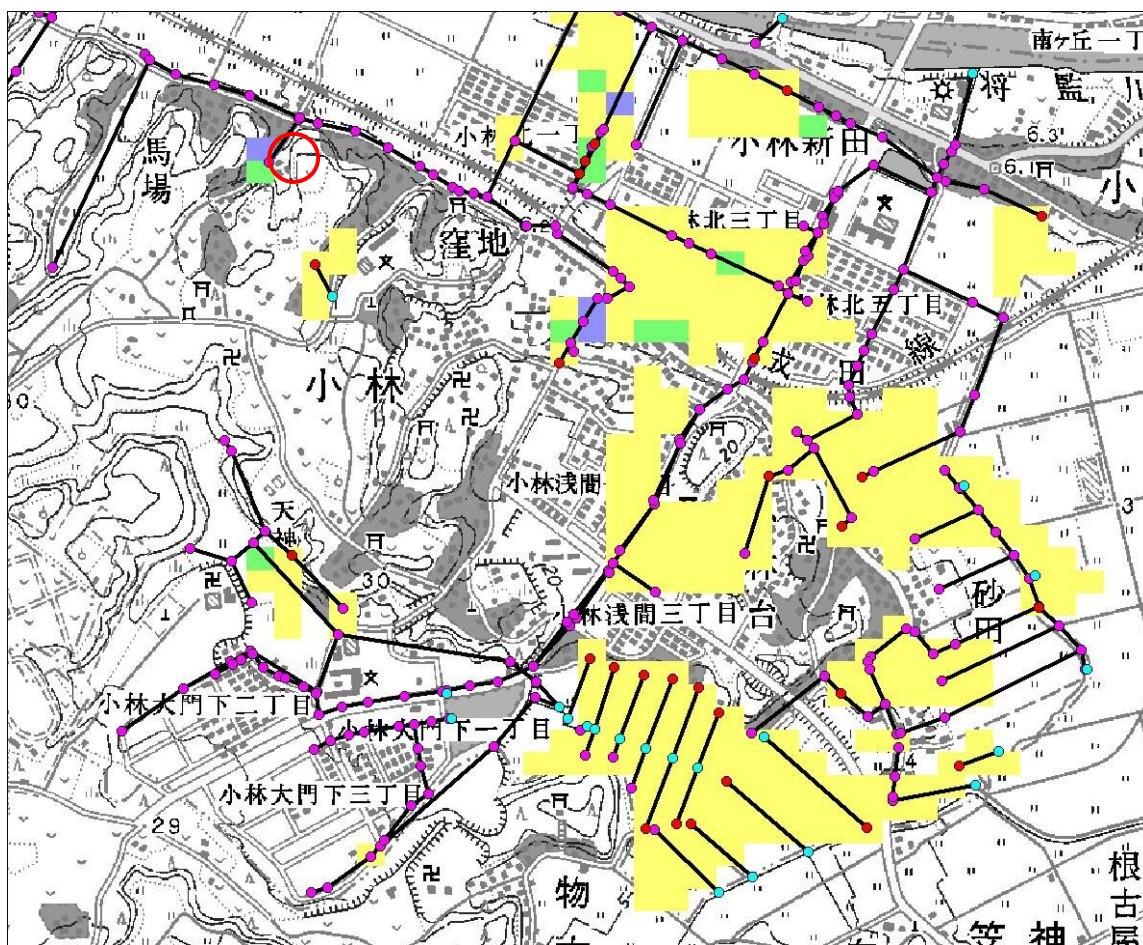


図- 5. 1.34 小林地区における浸水発生区域

## ■平成 19 年度報告書抜粋

小林地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.35に示す。

これに示されるとおり、低地部の水田、山間部の凹地部において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 0.8m であった。

これらの浸水被害の発生要因としては、既存水路の流下能力不足が挙げられるが、今後、下水道事業の進展に伴い雨水排水路の整備が進むことで、浸水被害の発生は解消されるものと考えられる。

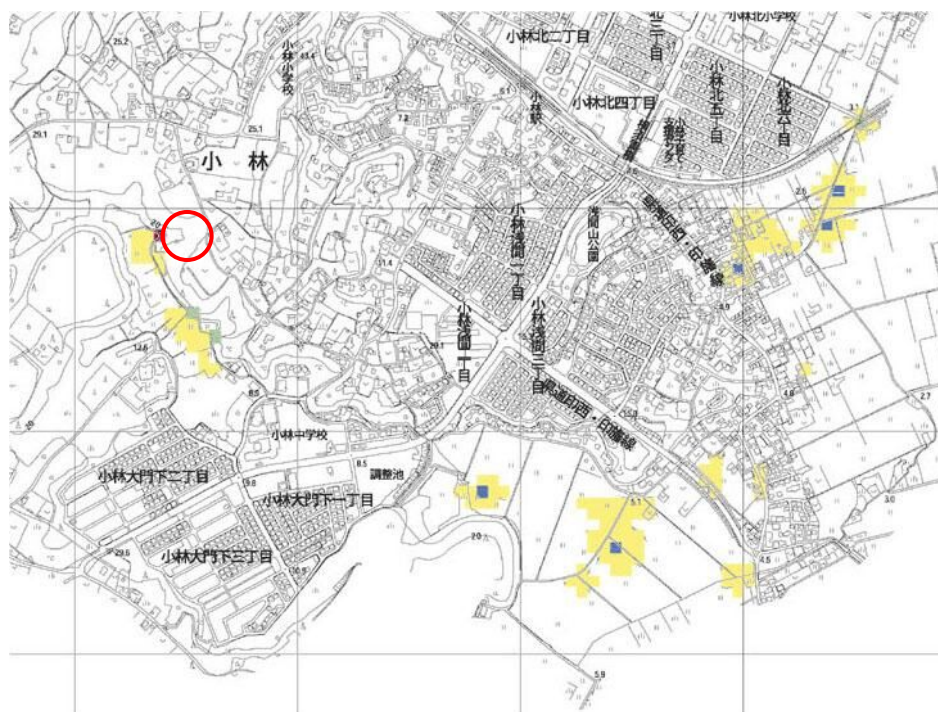


図- 5. 1.35 小林地区における浸水発生区域 (前回)

## 10. 白幡地区

### ■ 今回の解析結果

白幡地区における浸水発生状況を、図-5.1.36に示す。

木刈地区の住宅地および南側の水路沿いにおいて浸水が予想された。当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約1mであった。

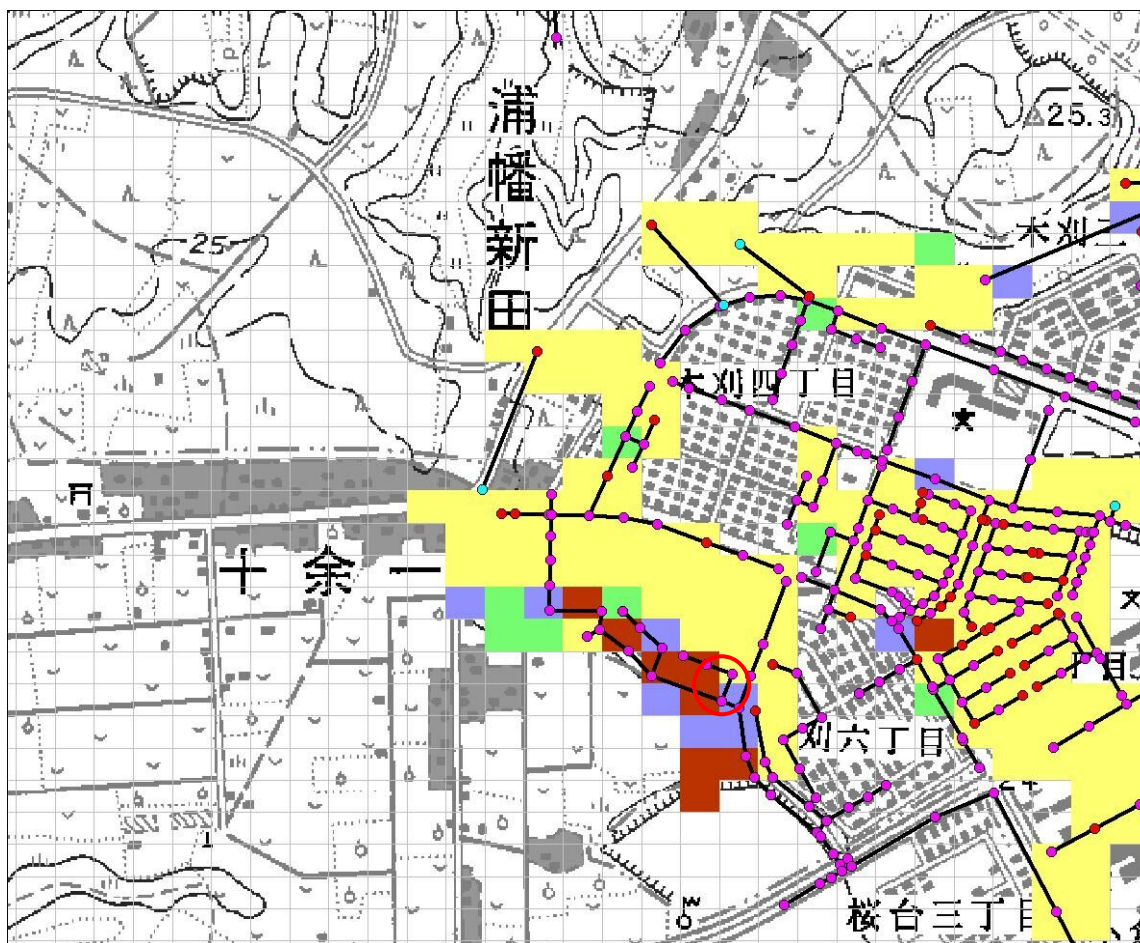


図-5.1.36 白幡地区における浸水発生区域

■平成 19 年度報告書抜粋

白幡地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.37に示す。

また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 1.5m であった。

これらの区域における浸水被害の発生要因としては、後背山地からの流出雨水を排除する既存水路の通水断面が不足していることが挙げられる。



図- 5. 1.37 白幡地区における浸水発生区域 (前回)

## 1 1. 小倉地区

### ■ 今回の解析結果

小倉地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.38に示す。

これに示されるとおり、浦部川、和泉川沿川の低地部、牧の木戸一丁目、小倉台一丁目、大塚二丁目などの住宅地において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 0.6m であった。この地点は前回の最大浸水地点と一致している。

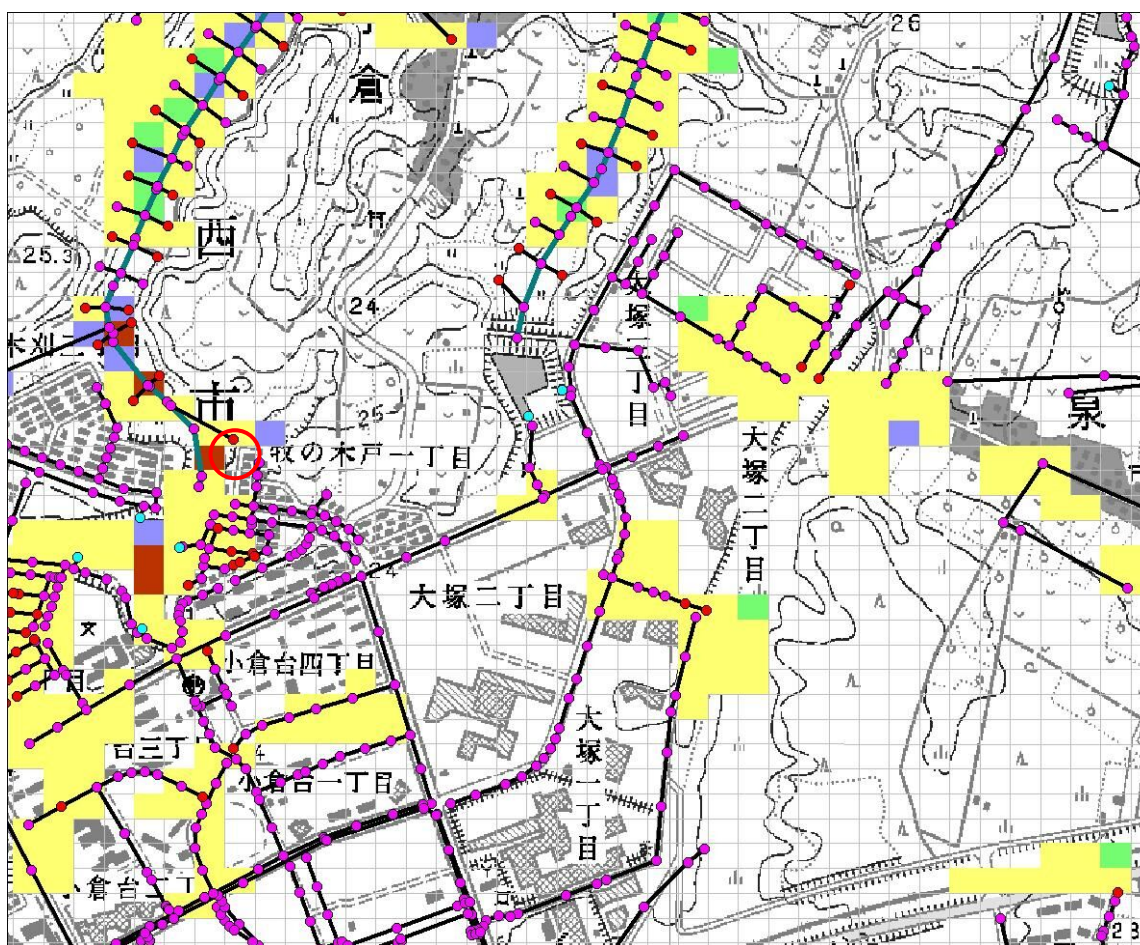


図- 5. 1.38 小倉地区における浸水発生区域



## ■平成 19 年度報告書抜粋

小倉地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.39に示す。

これに示されるとおり、浦部川沿川の低地部において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 4.6m であった。

これらの区域における浸水被害の発生要因としては、対象降雨に対し下水道事業により整備されている雨水管渠の流下能力が不足していることならびに、住宅地からの流出した雨水が凹地に集中して流れ込むことが挙げられるが、浸水区域ならびに浸水深が比較的小さなことから、雨水管渠の流下能力に余裕が生じた時点で速やかに解消されるものと予想される。

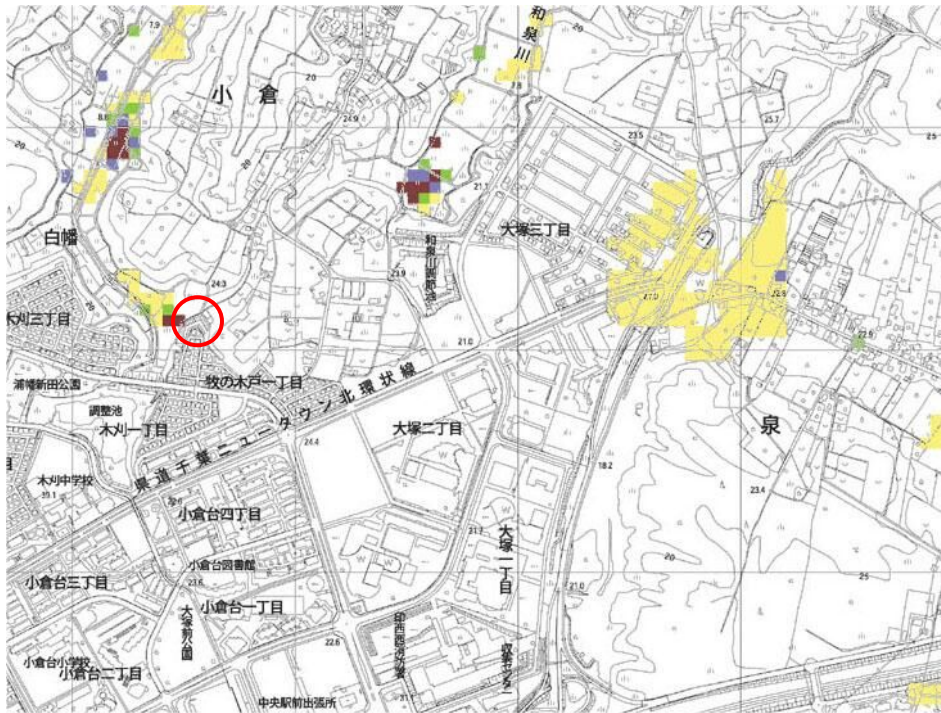


図- 5. 1.39 小倉地区における浸水発生区域 (前回)

## 1 2. 草深地区

### ■ 今回の解析結果

草深地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.40に示す。

これに示されるとおり、古新田川、師戸川沿川、および北総線沿いに浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約0.5mであった。

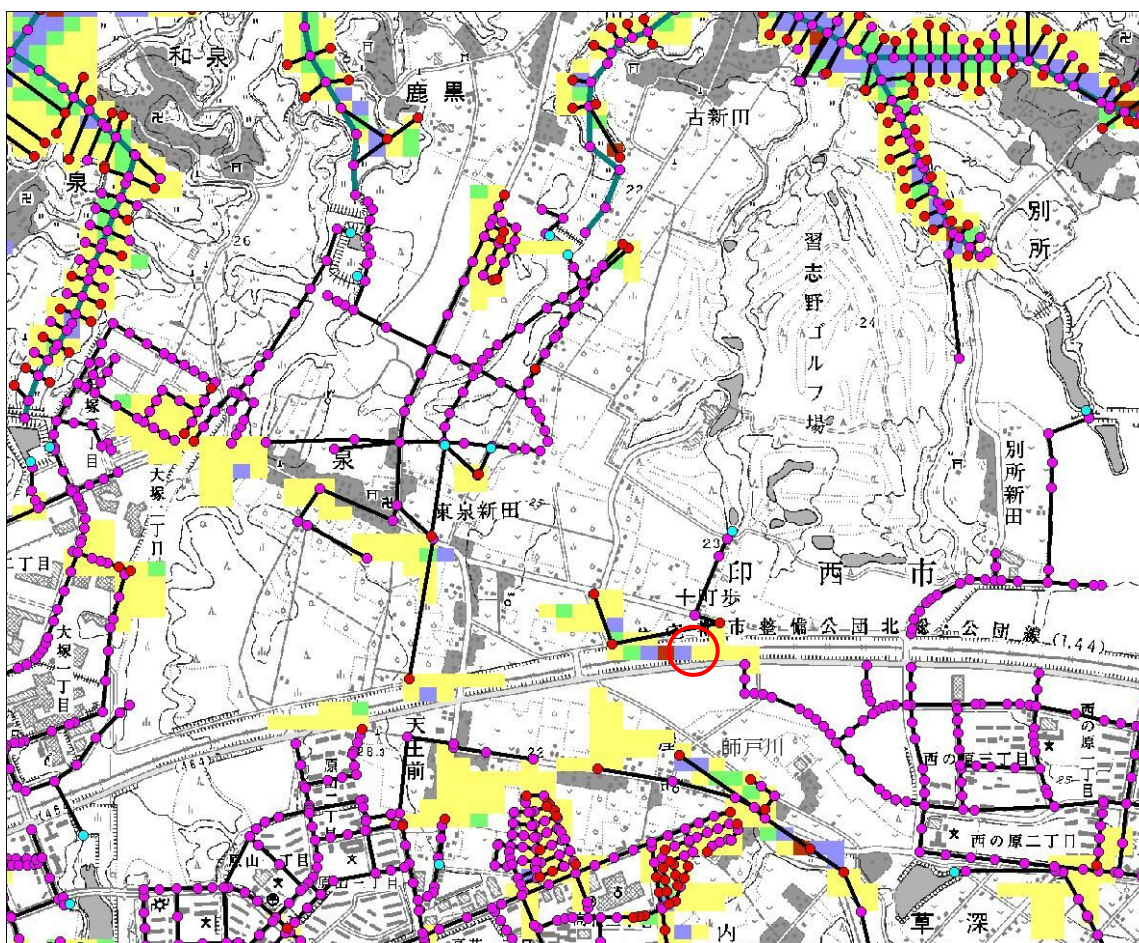


図- 5. 1.40 草深地区における浸水発生区域

## ■平成 19 年度報告書抜粋

草深地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.41に示す。

これに示されるとおり、師戸川沿川の広い範囲において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 1.6m であった。

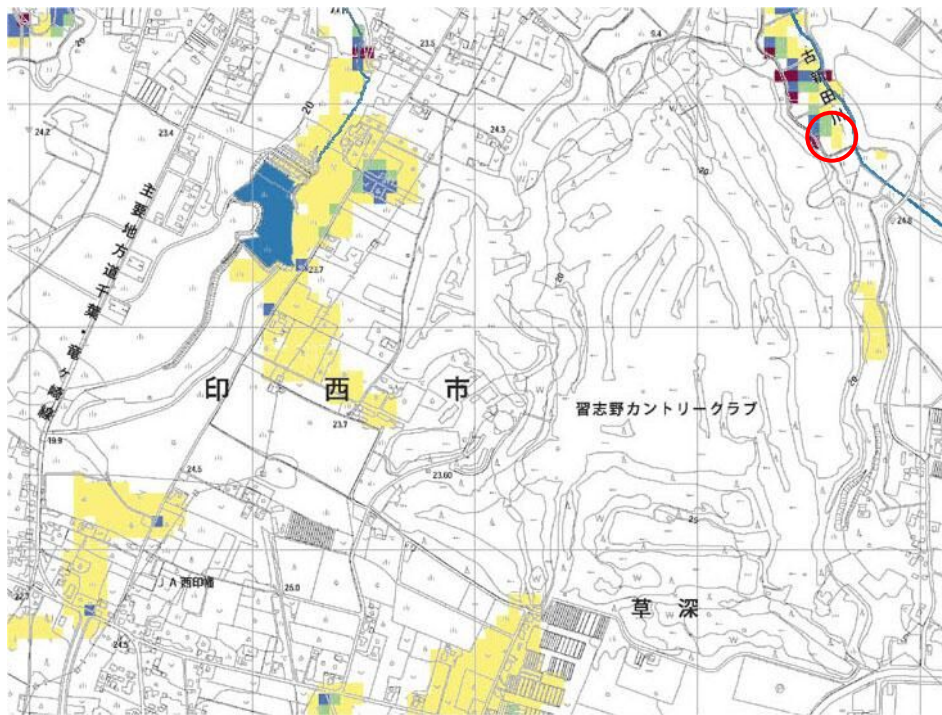


図- 5. 1.41 草深地区における浸水発生区域 (前回)

### 13. 宗甫地区

#### ■ 今回の解析結果

宗甫地区における浸水発生状況を、図-5.142に示す。

これに示されるとおり、亀成川沿川の低地において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 0.2m であった。この地点は前回の最大浸水地点と一致している。

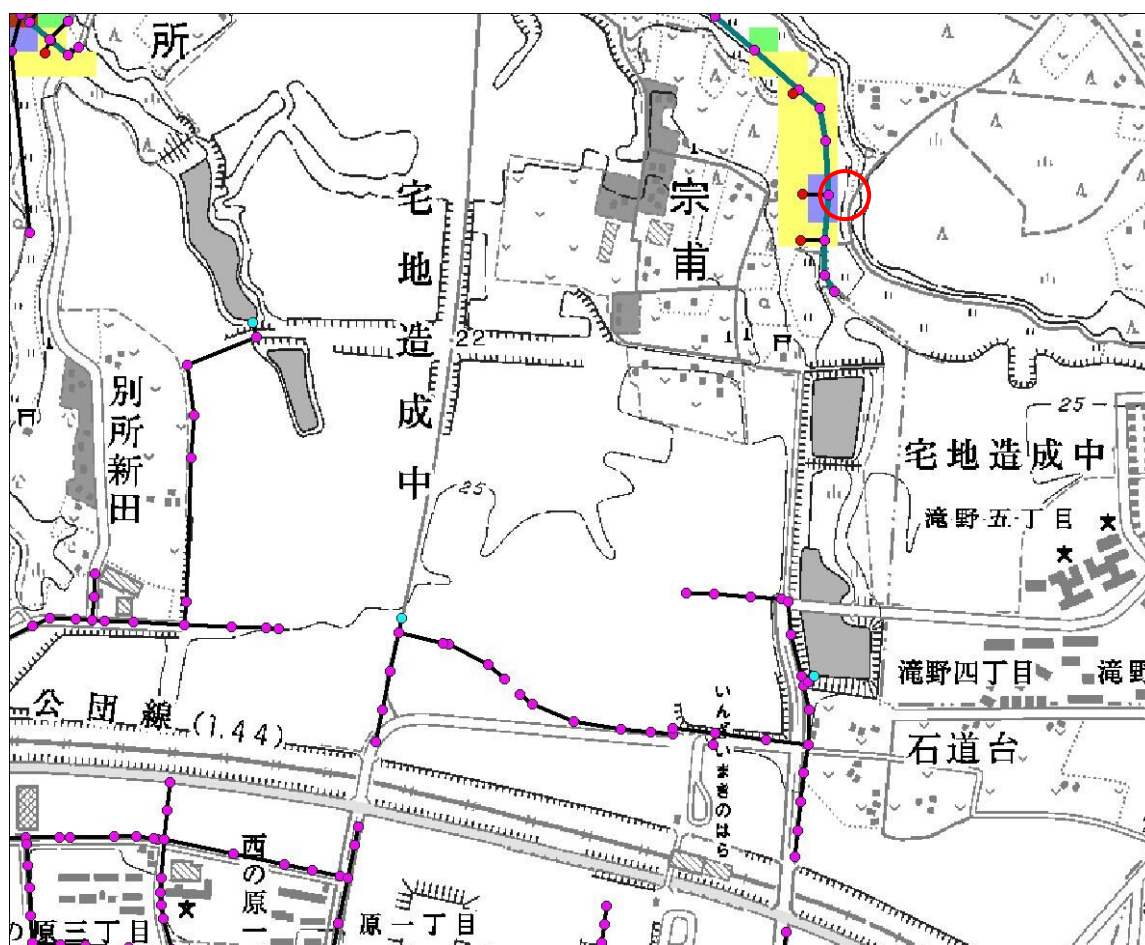


図-5.142 宗甫地区における浸水発生区域

## ■平成 19 年度報告書抜粋

宗甫地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.43に示す。

これに示されるとおり、亀成川沿川の低地において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 1.2m であった。

この浸水被害の発生要因として、解析対象降雨に対する亀成川の流下能力が不足していることが挙げられるが、亀成川水系では、亀成川改修工事全体計画により河道の拡幅が計画・着工されていることから、改修工事の進展に伴いこの地域における浸水被害は解消ないしは減少することが見込まれる。

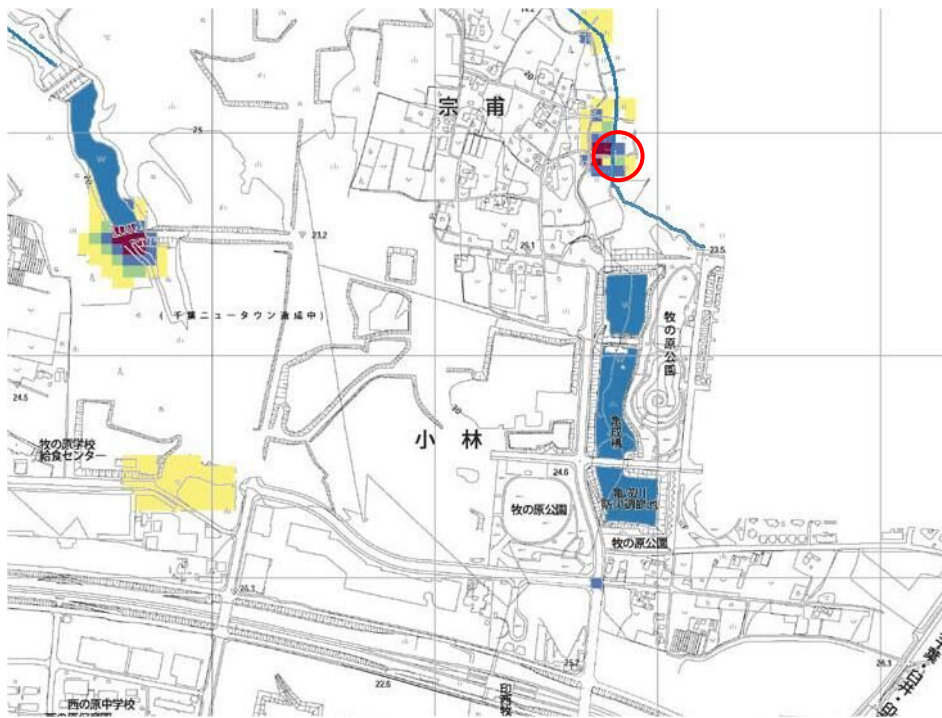


図- 5. 1.43 宗甫地区における浸水発生区域 (前回)

#### 14. ニュータウン地区

##### ■今回の解析結果

ニュータウン地区における浸水発生状況を、図-5.1.44に示す。

これに示されるとおり、戸神台一丁目ならびに千葉ニュータウン中央駅付近において、浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約0.3mであった。

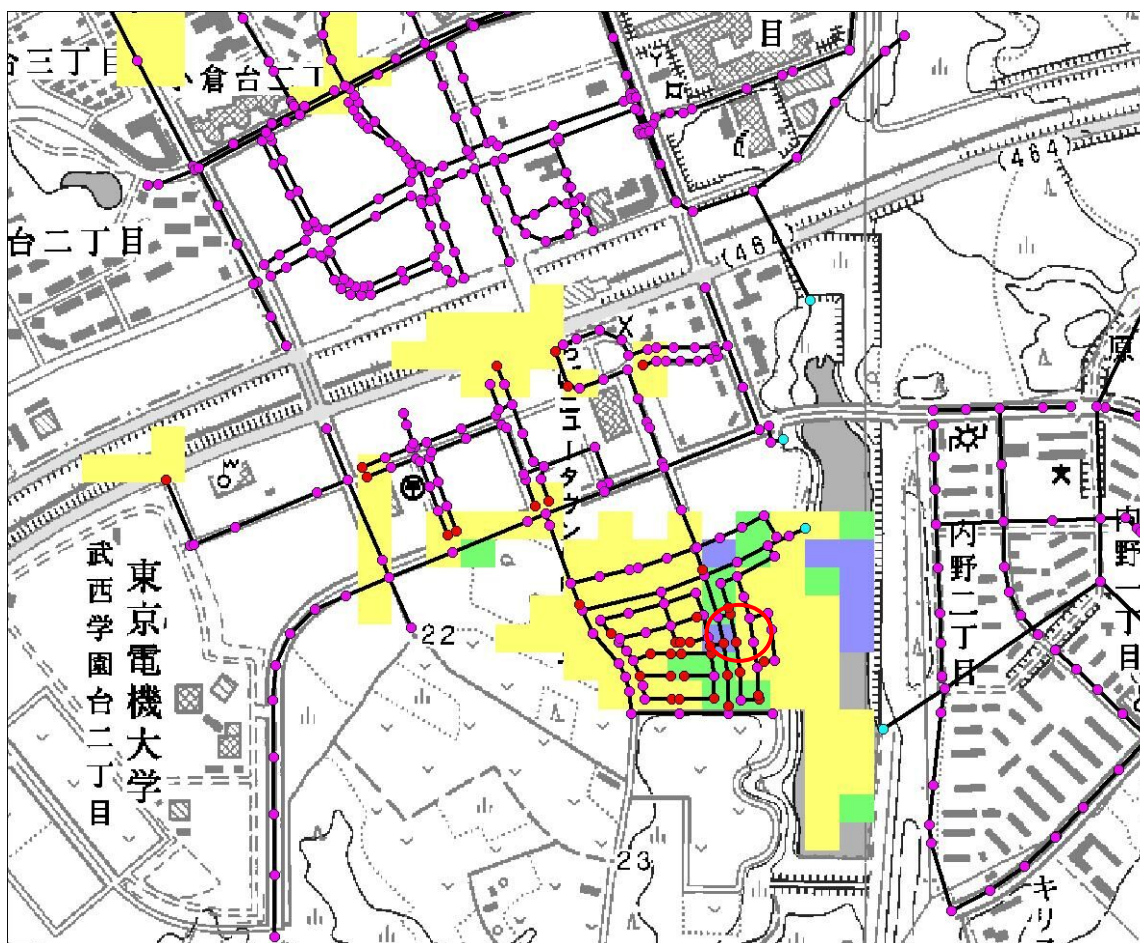


図-5.1.44 ニュータウン地区における浸水発生区域

## ■平成 19 年度報告書抜粋

ニュータウン地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.45に示す。

これに示されるとおり、戸神台一丁目ならびに原山2丁目付近において、浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 0.2m であった。

これらの浸水被害の発生要因としては、既設雨水管渠の能力が対象降雨に対して不足していることが挙げられるが、浸水水位としては 10cm 未満であることから、一時的な被害であり、管渠に余裕ができ次第速やかに解消されるものと考えられる。

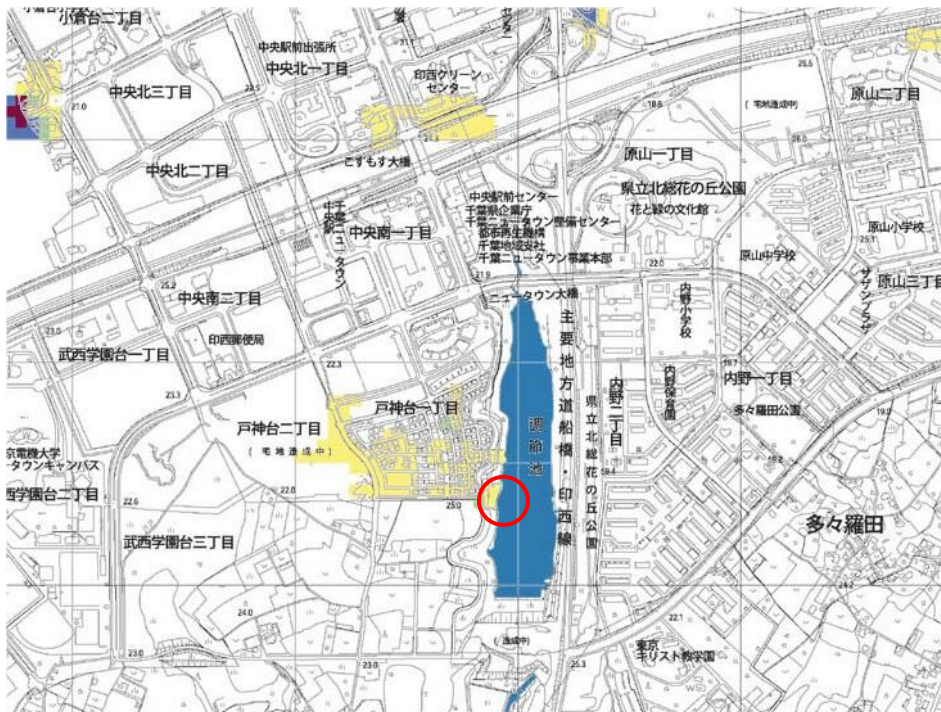


図- 5. 1.45 ニュータウン地区における浸水発生区域 (前回)

## 15. 高花地区

### ■ 今回の解析結果

高花地区における浸水発生状況を、図-5.146に示す。

これに示されるとおり、国道464号線沿線ならびに師戸川沿川において、浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約0.8mであった。

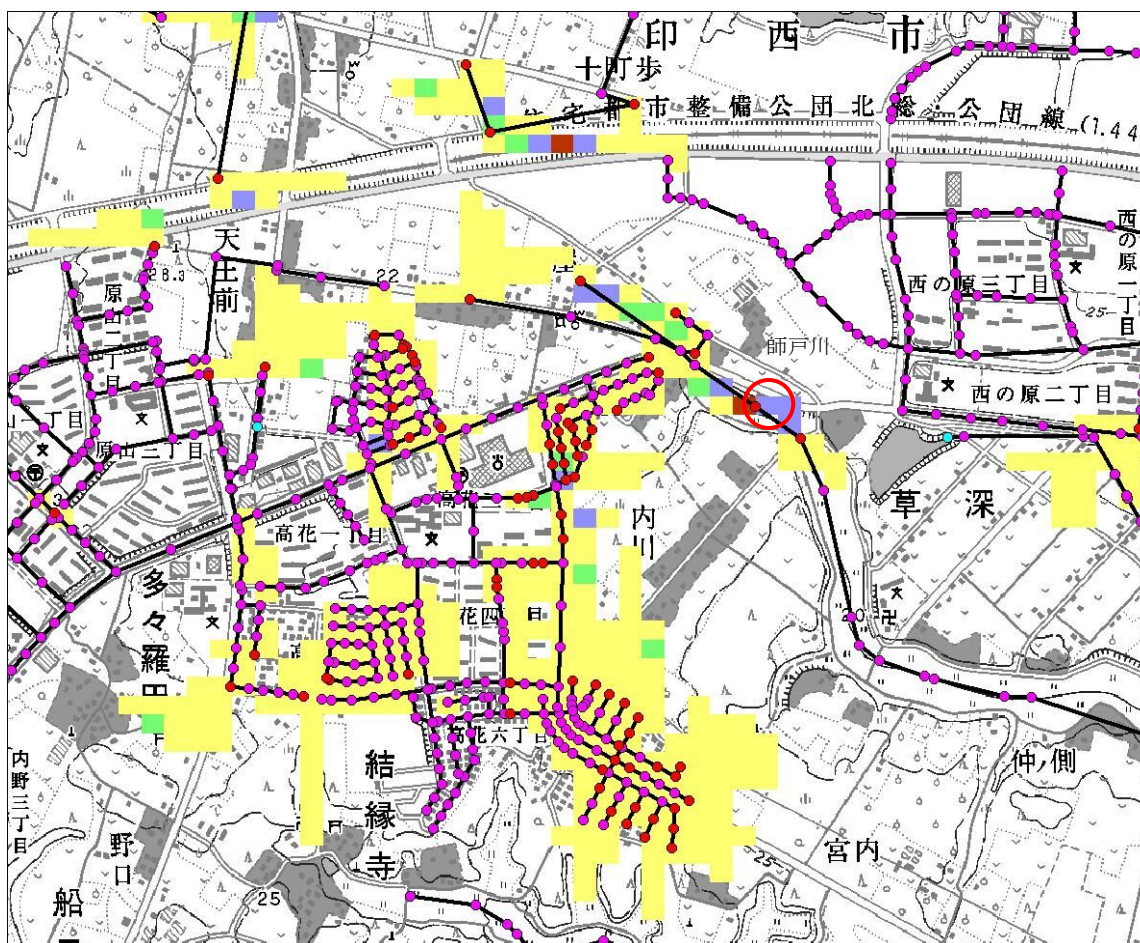


図-5.146 高花地区における浸水発生区域



## ■平成 19 年度報告書抜粋

高花地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.47に示す。

これに示されるとおり、国道 464 号線沿線ならびに師戸川沿川において、浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 1.5m であった。

この浸水被害の発生要因としては、既設水路ならびに師戸川の流下能力が対象降雨に対して不足していることが挙げられるが、今後、浸水深が最大であった箇所については、公共下水道事業により、雨水排水路の整備が進められることから、浸水被害の軽減・解消が見込まれる。

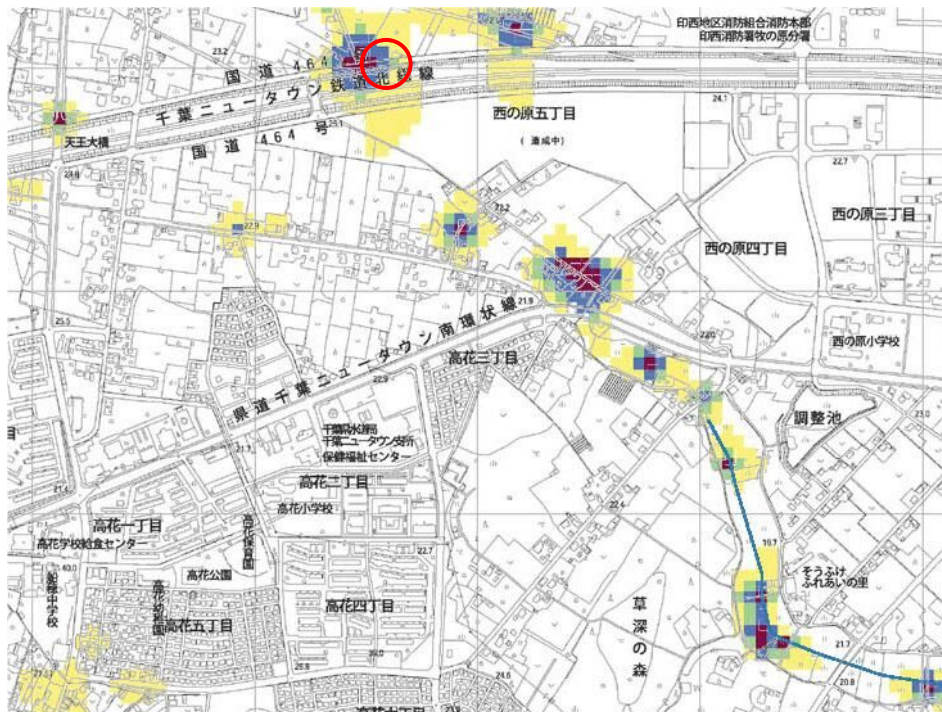


図- 5. 1.47 高花地区における浸水発生区域 (前回)

## 16. 牧の原地区

### ■ 今回の解析結果

牧の原地区における浸水発生状況を、図-5.148に示す。

これに示されるとおり、師戸川沿川および草深地区の水路沿いにおいて浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約1.0mであった。

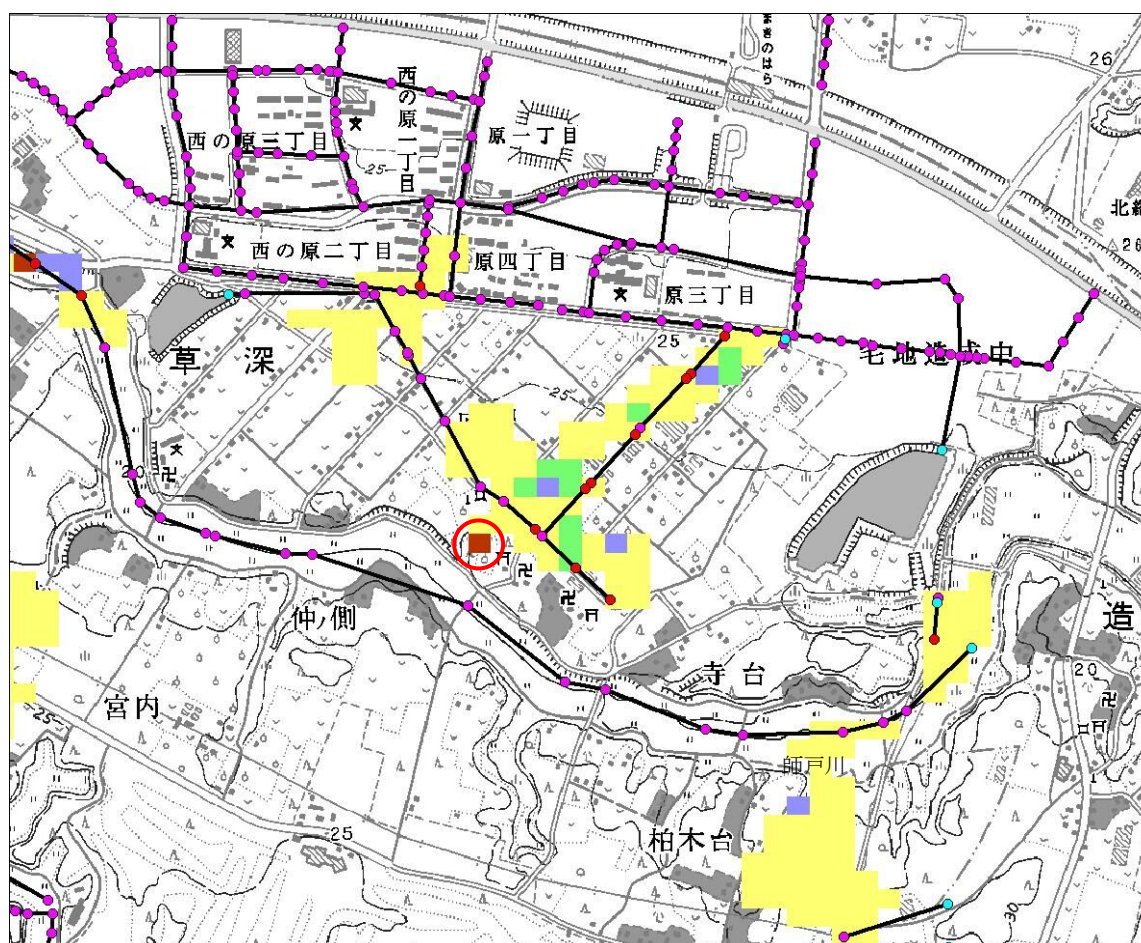


図-5.148 牧の原地区における浸水発生区域

## ■平成 19 年度報告書抜粋

牧の原地区における浸水発生状況を図- 5. 1.49に示す。

これに示されるとおり、師戸川沿川において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 1.0m であった。

この浸水被害の発生要因としては、既設水路ならびに既設水路の放流先である師戸川の流下能力が対象降雨に対して不足していることが挙げられる。

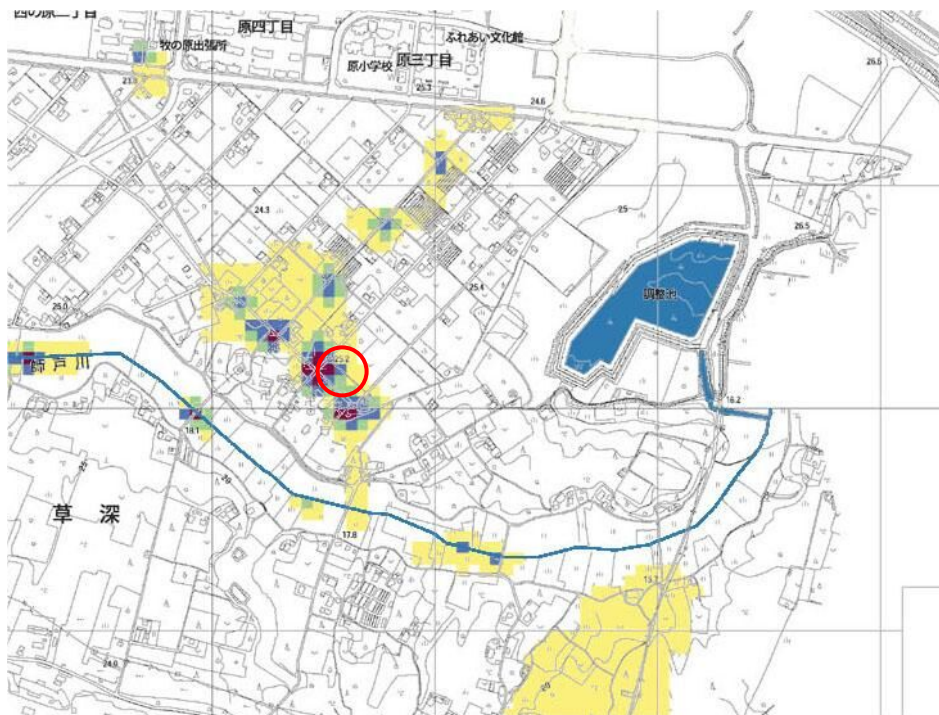


図- 5. 1.49 牧の原地区における浸水発生区域 (前回)

## 17. 武西地区

### ■ 今回の解析結果

武西地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.50に示す。

これに示されるとおり、神崎川、戸神川沿川の水田部において、浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約2.1mであった。浸水深が深い地域は周囲よりも地盤高が低い。

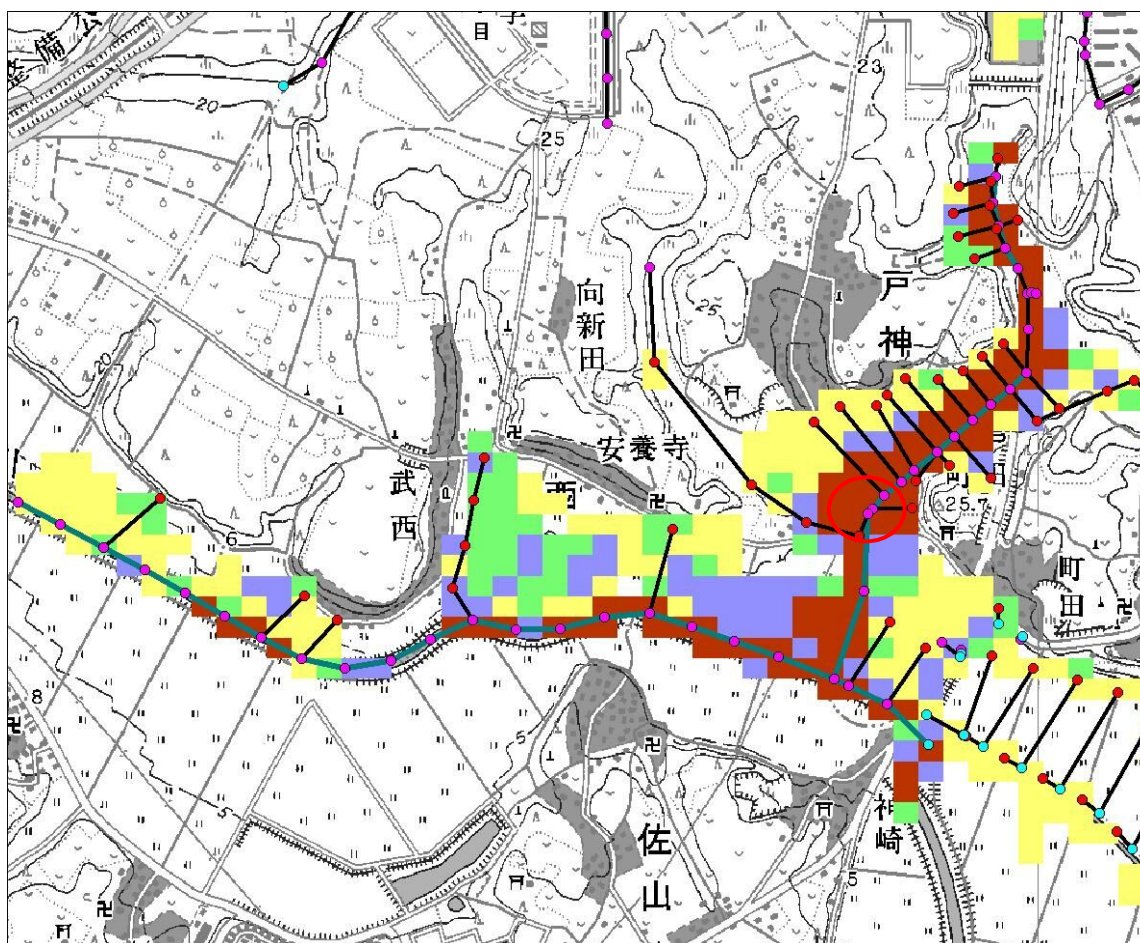


図- 5. 1.50 武西地区における浸水発生区域

## ■平成 19 年度報告書抜粋

武西地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.51に示す。

これに示されるとおり、神崎川沿川の水田部において、浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 1.4m であった。

この区域の浸水発生要因としては、対象降雨に対する既設排水水路の流下能力の不足と、既設水路の放流先である神崎川の水位上昇に伴う排水不良が挙げられる。

しかし、神崎川においては、神崎川河川改修全体計画に従い、河道拡幅工事が計画・実施されていることから、河川改修が完了した際には、浸水被害の軽減・解消が見込まれる。

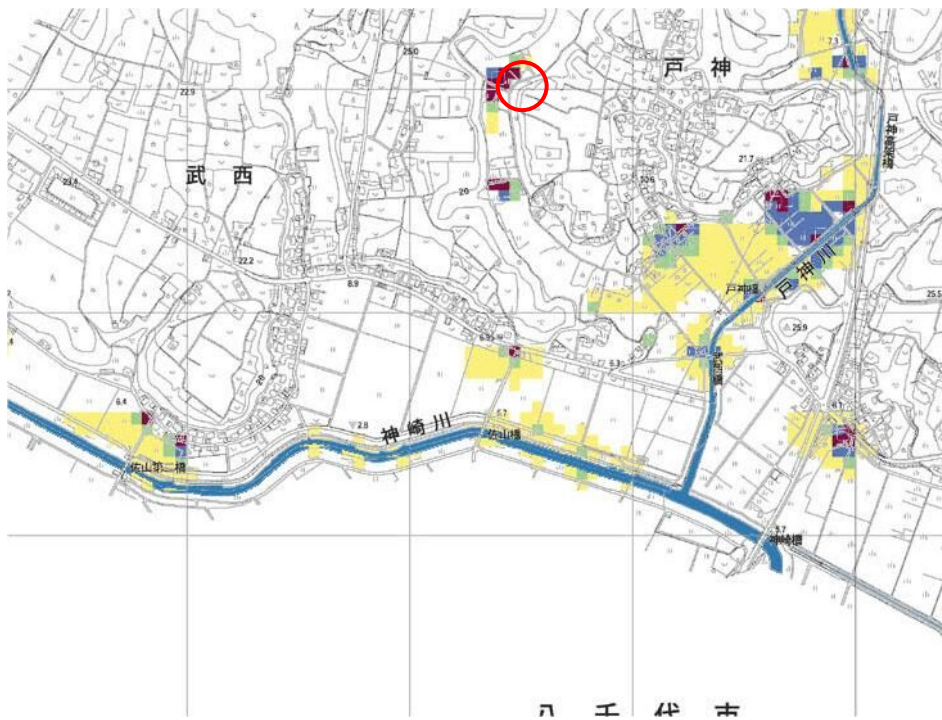


図- 5. 1.51 武西地区における浸水発生区域 (前回)

## 18. 船尾地区

### ■ 今回の解析結果

船尾地区における浸水発生状況を、図-5.152に示す。

これに示されるとおり、既設農業用水路沿川等、地盤高の低い地域において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約0.3mであった。

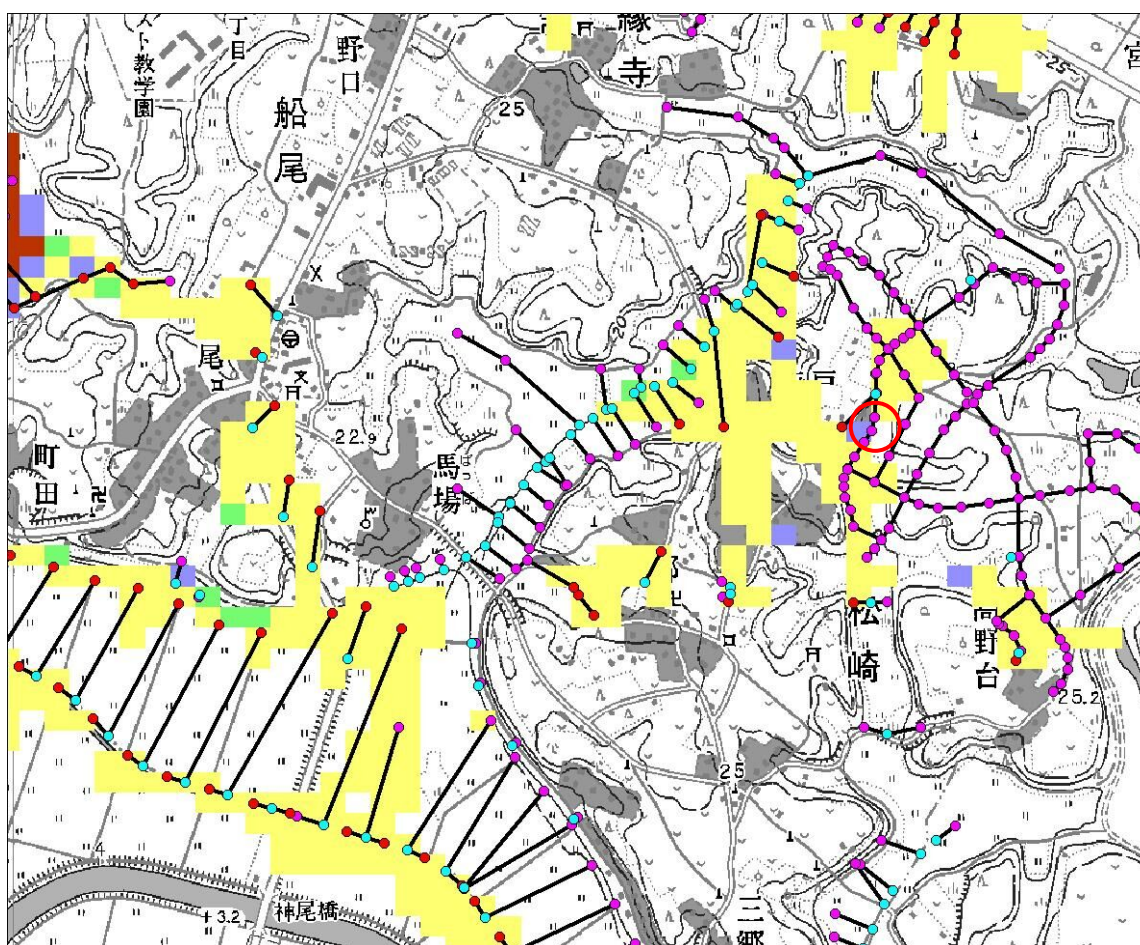


図-5.152 船尾地区における浸水発生区域

## ■平成 19 年度報告書抜粋

船尾地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.53に示す。

これに示されるとおり、既設農業用水路沿川等、地盤高の低い地域において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 1.7m であった。

これらの区域における浸水被害の発生要因としては、地区内に既存する農業用排水路の流下能力が、対象降雨に対して不足していることが挙げられる。

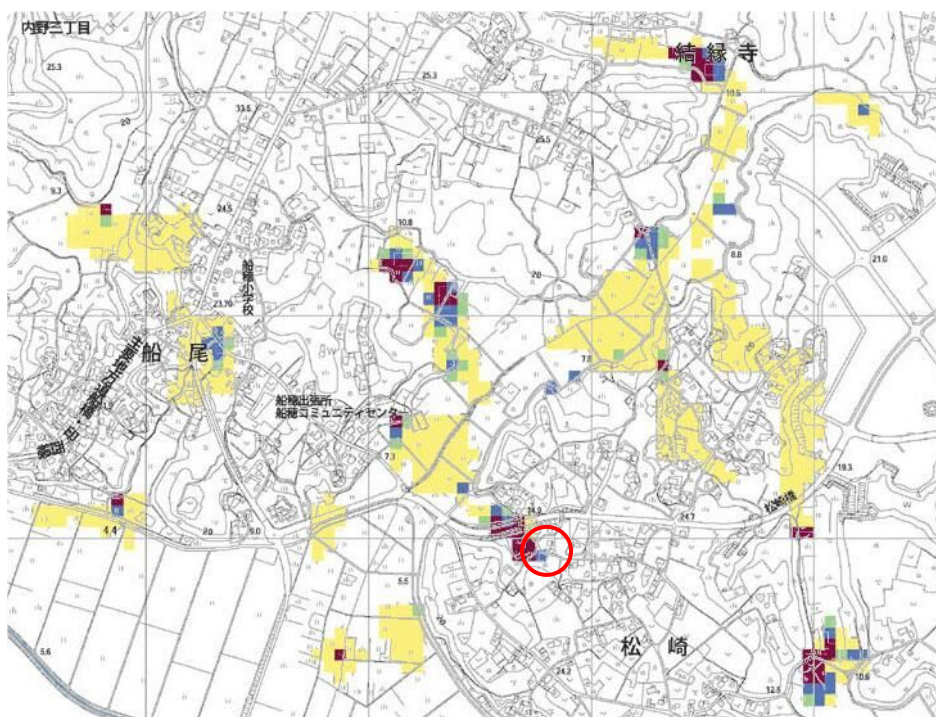


図- 5. 1.53 船尾地区における浸水発生区域 (前回)

## 19. 松崎地区

### ■ 今回の解析結果

松崎地区における浸水発生状況を、図-5.154に示す。

これに示されるとおり、当該地区の南側に位置する地盤高の低い水田地帯において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約0.26mであった。この地点は前回の最大浸水地点と一致している。

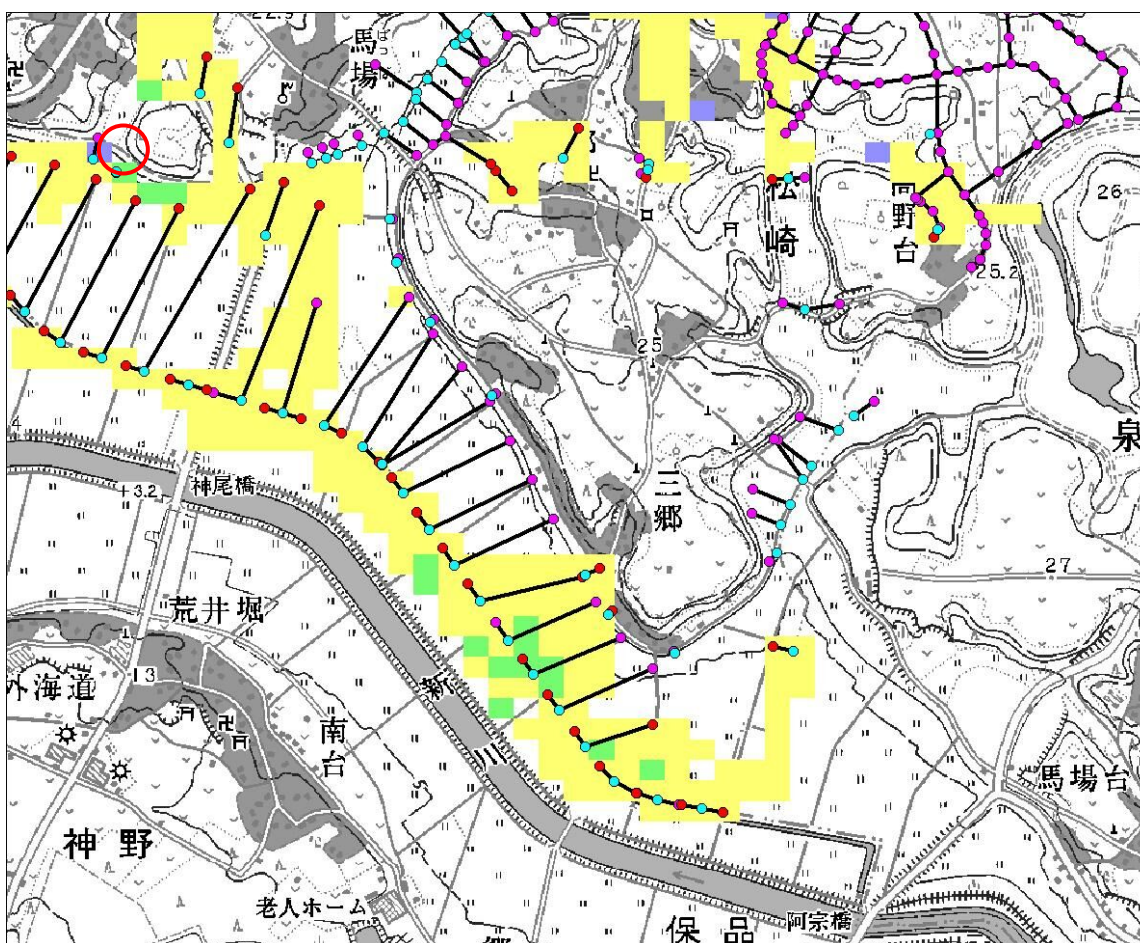


図-5.154 松崎地区における浸水発生区域



■平成 19 年度報告書抜粋

松崎地区における浸水発生状況を、図- 5. 1.55に示す。

これに示されるとおり、当該地区の南側に位置する地盤高の低い地域において浸水被害の発生が予測された。また、当該地域内において浸水深が最大となったのは、図中の○で示した地点であり、約 2.2m であった。



図- 5. 1.55 松崎地区における浸水発生区域 (前回)

#### (4) 内水氾濫解析

設定した条件に基づいて、内水氾濫解析を実施した。  
解析結果をもとに、内水浸水想定区域図を作成した。

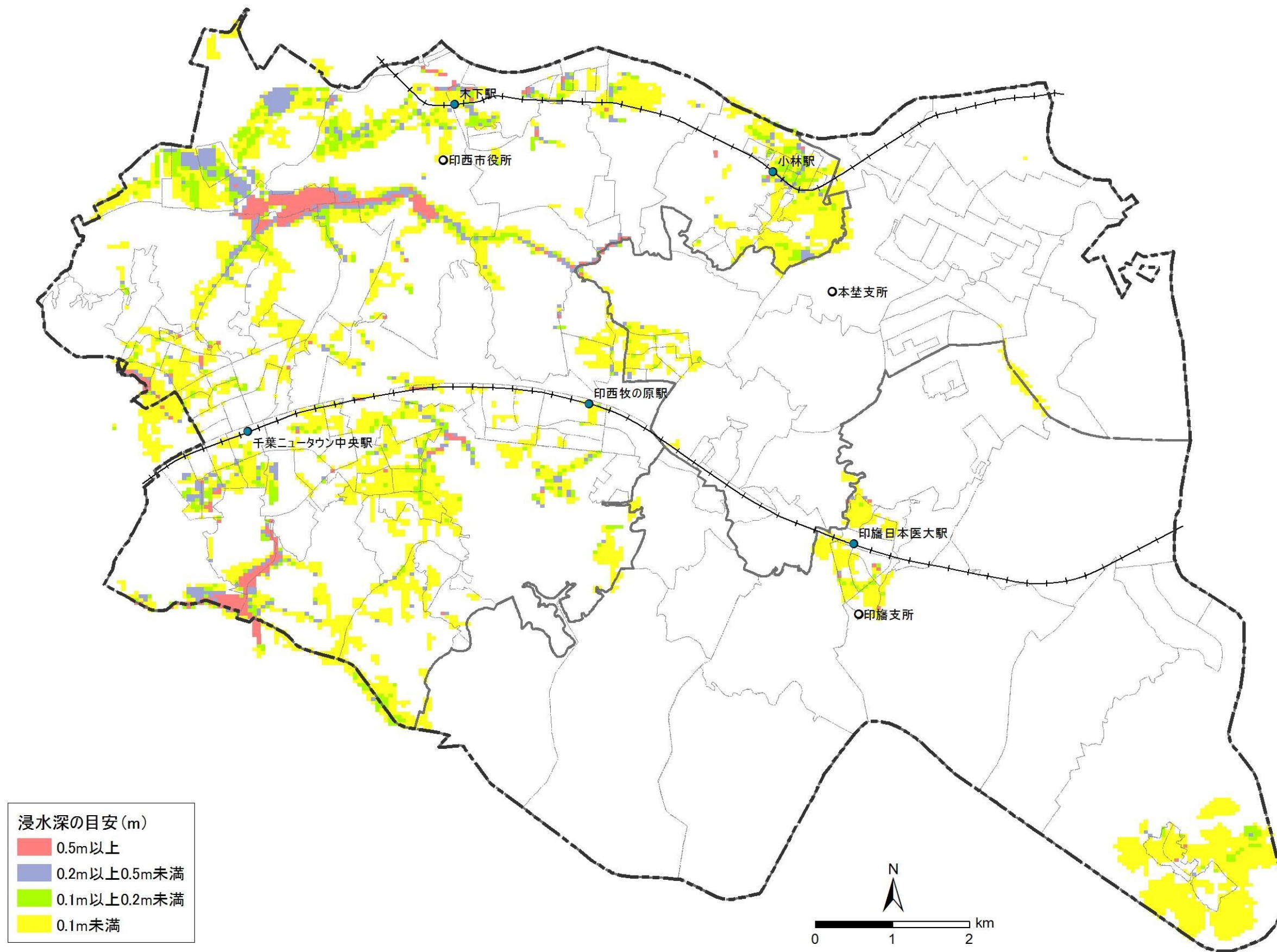


図- 5. 1.56 内水浸水想定区域

## 5.2 土砂災害危険度調査

### 5.2.1 概要

土砂災害危険箇所には、表- 5. 2.1に示すように、土石流、急傾斜地、地すべりがある。千葉県では土砂災害危険箇所の調査を行っており、危険箇所の情報は千葉県のホームページから閲覧可能である。

印西市内には土砂災害危険箇所として、急傾斜地のみが 258 箇所ある。そのうち 34 箇所が、平成 24 年（2012 年）3 月 2 日に、土砂災害警戒区域・特別警戒区域と指定された。その一覧を表- 5. 2.2に示す。

勾配 30 度以上の崖は大雨等で崩れるおそれがあり、斜面の高さが高いほど崩れたときの被害が大きくなる。とくに張り出し、浮き石、亀裂、わき水等がある崖は危険である。急傾斜地崩壊危険度とは、傾斜度 30 度以上、崖の高さが 5m 以上の急斜面であり、崩壊した場合の人家等への影響の大きさから、3 つの危険箇所で分類される。

表- 5. 2.1 土砂災害危険箇所の概要

種 別	解 説	
土石流	山や谷の土・砂・石などが、梅雨の長雨や台風の大雨による水と一緒に なって、ものすごい勢いで流れてくる現象。流れの速さは 20~40km/h のものが多く、大きな岩を動かすほど強い力をもつこともある	
	土石流危険溪流Ⅰ	人家 5 戸以上ないし公共施設 1 以上
	土石流危険溪流Ⅱ	人家 1 戸以上 5 戸未満
	土石流危険溪流Ⅲ	人家はないが、都市計画区域内
	土石流危険区域	土石流発生時の土砂氾濫区域
急傾斜地	勾配 30 度以上の崖は大雨等で崩れる恐れがあり、斜面の高さが高いほ ど崩れたときの被害が大きくなる。とくに張り出し、浮き石、亀裂、わ き水等がある崖は危険である。	
	急傾斜地崩壊危険箇所Ⅰ	人家 5 戸以上ないし公共施設 1 以上
	急傾斜地崩壊危険箇所Ⅱ	人家 1 戸以上 5 戸未満
	急傾斜地崩壊危険箇所Ⅱ	人家はないが、都市計画区域内
地すべり	地面は、種類や固さの違う土や石が層になり、それがいくつも積み重な って形成されている。緩やかな斜面の場所で、雨水などがしみこんで粘 土のように滑りやすい地層の上に地下水としてたまり、そこから上の地 面が動き出すのが地すべりである。地すべりの発生・拡大の危険性があ り、河川・人家・農地・公共施設等に被害の生じる恐れのある区域を地 すべり危険箇所としている。	

表- 5. 2. 2 印西市内に存在する土砂災害警戒区域・特別警戒区域の一覧  
(公示：平成 24 年 3 月 2 日)

No.	箇所番号	箇所名	所在地	
			地区名	字名
1	I-0327	安養寺	印西地区	安養寺
2	I-0328	浦部	印西地区	浦部宮内
3	I-0329	浦部1	印西地区	浦部宮内
4	I-0330	宮内	印西地区	浦部御手洗
5	I-0331	三郷	印西地区	松崎三郷
6	I-0333	大森	印西地区	大森
7	I-0334	武西1	印西地区	武西
8	I-0335	武西2	印西地区	武西
9	I-0336	和泉1	印西地区	和泉
10	I-1291	戸神1	印西地区	戸神
11	I-1292	松崎3	印西地区	松崎三郷
12	I-0307	一本松	印旛地区	瀬戸一本松
13	I-0311	西方	印旛地区	岩戸西方
14	I-0312	仲村	印旛地区	吉高仲村
15	I-0313	蕪和田	印旛地区	吉高蕪和田
16	I-0314	蕪和田2	印旛地区	吉高蕪和田
17	I-0315	辺田	印旛地区	平賀辺田
18	I-1287	馬々台	印旛地区	吉田馬々台
19	I-1288	久保作	印旛地区	吉高久保作
20	I-1289	株木	印旛地区	萩原株木
21	I-1498	萩原6	印旛地区	萩原和田谷
22	I-1499	萩原10	印旛地区	萩原辺田谷
23	I-1500	吉高18	印旛地区	吉高宮作
24	I-1501	吉高20	印旛地区	吉高蕪和田
25	I-1502	瀬戸3	印旛地区	瀬戸一本松
26	I-1504	吉田2	印旛地区	吉田鼠内
27	I-1505	師戸11	印旛地区	師戸内野
28	I-1506	平賀15	印旛地区	平賀辺田
29	I-2074	松虫13	印旛地区	松虫常光寺谷
30	I-0337	戸崎	本埜地区	矢口戸崎
31	I-0338	笠神	本埜地区	笠神向辺田
32	I-0339	物木1	本埜地区	物木
33	I-0340	物木2	本埜地区	物木
34	II-6894	岩戸川岸	印旛地区	岩戸船戸

## 5.2.2 危険度評価

本調査では、土砂災害警戒区域・特別警戒区域と指定された34箇所に対し、平成19年度地震被害想定調査の手法を用いて評価した。県では、まず、急傾斜地斜面カルテをもとに、表- 5. 2.3に示す判定基準によって、平常時（降雨時）の急傾斜地崩壊危険度を判定した。次に、その判定結果に表- 5. 2.4に示す地震動の強さを加味し危険度評価を行った。ただし、急傾斜地法（急傾斜地の崩壊による災害の防止に関する法律）に基づく対策工事が完了済みの箇所は、崩壊する危険度が低いとみなし、危険度判定ランクをCとする。

表- 5. 2.3 平常時（降雨時）の急傾斜地崩壊危険度の判定基準

大項目	データ項目	小項目	
			点数
①斜面高（H）m	斜面の高さ	$50 \leq H$	10
		$30 \leq H < 50$	8
		$10 \leq H < 30$	7
		$H < 10$	3
②斜面勾配（ $\alpha$ ）	傾斜度	$59^\circ \leq \alpha$	7
		$45^\circ \leq \alpha < 59^\circ$	4
		$\alpha < 45^\circ$	1
③オーバーハング	地表の状況	オーバーハングあり	4
		オーバーハングなし	0
④斜面の地盤	地表の状況	亀裂が発達、開口しており転石、浮石が点在する	10
		風化、亀裂が発達した岩である	6
		礫混じり土、砂質土	5
		粘質土	1
		風化、亀裂が発達していない岩である	0
⑤表土の厚さ	表土の厚さ	0.5m 以上	3
		0.5m 未満	0
⑥湧水	湧水	有	2
		無	0
⑦落石・崩壊頻度	崩壊履歴	新しい崩壊地がある	5
		古い崩壊地がある	3
		崩壊地は認められない	0

※『急傾斜地崩壊危険箇所カルテを用いた地震時斜面危険度予測方式（昭和62年・宮城県）に基づき、東京都の斜面データに合わせて作成』した、東京都「首都直下地震による東京の被害想定（平成18年3月）」より引用

表- 5. 2.4 震度による急傾斜地等地震危険度判定ランク

震度	基準要素点	13 点以下	14～23 点	24 点以上
6 強以上		A	A	A
6 弱		B	A	A
5 強		C	B	A
5 弱		C	C	B

※『宮城県急傾斜地崩壊危険箇所カルテを用いた地震時斜面危険度予測方式（昭和 62 年・宮城県）：点数と危険度ランクの関係は、道路震災対策委員会（昭和 61 年）による法面・斜面耐震判定方法による』東京都「首都直下地震による東京の被害想定（平成 18 年 3 月）」より引用

[危険度判定ランクの説明]

- ・ A：危険性が高い
- ・ B：危険性がある
- ・ C：危険性が低い

印西市直下の地震による急傾斜地崩壊危険度の予測結果は、対象の34箇所のうち、対策工事が完了済みである2箇所を除いては、危険性が高い（A）と予測された。これは、印西市直下の地震の震度が、ほとんど震度6強であることが起因している。

一方、東京湾北部地震の場合、震度6弱に存在する主な急傾斜地は危険性が高い（A）と予測されたものの、平常時の急傾斜地の状態によっては危険性がある（B）と予測された。表- 5. 2.5に想定地震ごとの急傾斜地崩壊危険度の予測結果を示す。

表- 5. 2.5 急傾斜地崩壊危険度の予測結果

箇所名	対策工	点数	印西市直下		東京湾北部	
			震度	被害ランク	震度	被害ランク
I-0307(一本松)	なし	15	6強	A	6弱	A
I-0311(西方)	なし	18	6強	A	6弱	A
I-0312(仲村)	なし	10	6強	A	6弱	B
I-0313(蕪和田)	なし	22	6強	A	6弱	A
I-0314(蕪和田2)	なし	25	6強	A	6弱	A
I-0315(辺田)	なし	17	6強	A	6弱	A
I-0327(安養寺)	なし	22	6強	A	6強	A
I-0328(浦部)	なし	29	6強	A	6弱	A
I-0329(浦部1)	なし	20	6強	A	6弱	A
I-0330(宮内)	なし	12	6強	A	6弱	B
I-0331(三郷)	なし	25	6強	A	6弱	A
I-0333(大森)	なし	14	6強	A	6弱	A
I-0334(武西1)	なし	23	6強	A	6弱	A
I-0335(武西2)	なし	17	6強	A	5強	B
I-0336(和泉1)	なし	15	6強	A	6弱	A
I-0337(戸崎)	有	20	6強	C	6弱	C
I-0338(笠神)	有	19	6強	C	5強	C
I-0339(物木1)	なし	18	6強	A	5強	B
I-0340(物木2)	なし	18	6強	A	5強	B
I-1287(馬々台)	なし	18	6強	A	6弱	A
I-1288(久保作)	なし	16	6強	A	6弱	A
I-1289(株木)	なし	26	6強	A	6弱	A
I-1291(戸神1)	なし	18	6強	A	6弱	A
I-1292(松崎3)	なし	26	6強	A	6弱	A
I-1498(萩原6)	なし	19	6強	A	5強	B
I-1499(萩原10)	なし	20	6強	A	5強	B
I-1500(吉高18)	なし	15	6強	A	6弱	A
I-1501(吉高20)	なし	15	6強	A	6弱	A
I-1502(瀬戸3)	なし	14	6強	A	5強	B
I-1504(吉田2)	なし	18	6強	A	6弱	A
I-1505(師戸11)	なし	12	6強	A	6弱	B
I-1506(平賀15)	なし	19	6強	A	6弱	A
I-2074(松虫13)	なし	8	6強	A	6弱	B
II-6894(岩戸川岸)	なし	22	6強	A	6弱	A